中 園 遺 跡

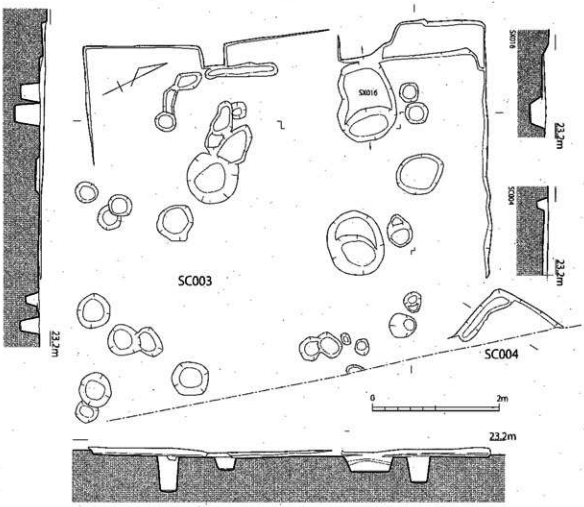
福岡県飯塚市太郎丸所在遺跡の調査

飯塚市文化財調査報告書　第６１集

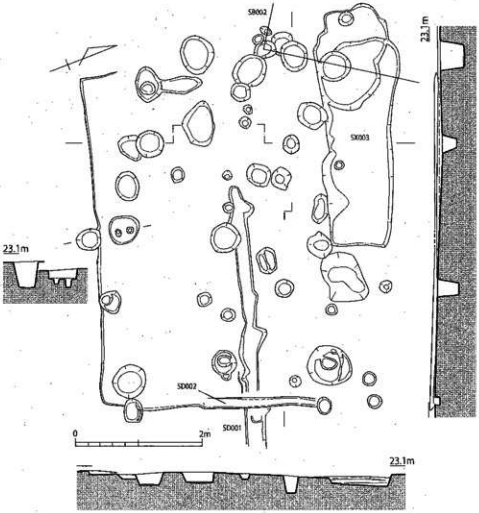
２０２４

飯 塚 市 教 育 委 員 会

右掲図の縮尺が誤っていました。訂正願います。



（正）　第11図（14頁）　中園遺跡SC003・SC004実測図（1/60）



（正）　第13図（16頁）　中園遺跡SC005実測図（1/60）

序

福岡県の中央部、筑豊地域の中心都市である飯塚市は豊かな水と緑に囲まれ、古来より生活環境に恵まれてきました。こうした環境のもと、立岩遺跡に代表されるように市内には先人たちの残した貴重な足跡である文化財が数多く存在しています。

しかし、近年の都市化に伴う開発により、地下に眠る埋蔵文化財の一部が失われつつあることもまた事実です。飯塚市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。

本書は老人ホーム建設に伴い令和２・３年度に発掘調査を実施した中園遺跡の調査報告書です。今回の発掘調査では、主に古墳時代の住居跡や、古代～中世の井戸などが発見されました。当遺跡が所在する地は古代官道（田河道）の推定ルートにあたり、「穂波郡」の中心域を想定する上でも重要な地域です。今後、本書が地域の歴史研究や教育、文化財保護思想の理解と普及に多少なりとも貢献できれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査・報告書の作成にあたり、多大なご協力をいただきました方々に厚く感謝いたします。

令和６年３月２９日

飯塚市教育委員会
教育長職務代理者　上田　敬子

例　　言

1．本書は、福岡県飯塚市太郎丸に所在し、老人ホーム建設に伴い発掘調査を実施した中園遺跡発掘調査報告書である。

2．発掘調査及び報告書作成は、社会福祉法人サミックの委託を受け、飯塚市教育委員会文化課が実施した。

3．本書使用の遺構実測図は、櫛山範一・飛野博文・八木健一郎・久保田あかね・前川陽子が作成した。本書使用の遺物実測図は、大庭淑佳が作成した。

4．遺構･遺物の製図は、大庭がおこなった。

5．本書使用の方位は座標北である。

6．遺構の略号として用いたものは､SC（竪穴住居跡）､SB（掘立柱建物跡）､SE（井戸）､SK（土坑）､SX（不明土坑）、SD（溝跡）、SP（柱穴）である。

7．本書の執筆・編集は八木がおこなった。

8．本書に関わる図面、写真、遺物などの資料は、飯塚市教育委員会で保管している。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査の経緯 …… 1
　2．調査組織 …… 1
Ⅱ．地理的・歴史的環境 …… 3
　1．地理的環境 …… 3
　2．歴史的環境 …… 3
Ⅲ．中園遺跡の調査 …… 7
　1．調査の方法 …… 7
　2．遺構と遺物 …… 7
Ⅳ．おわりに …… 43

図版目次

図版１　1.調査区遠景（南から）
　　2.調査区近景（東から）
　　3.調査区全景（東から）
図版２　1.ＳＣ００１（東から）
　　2.ＳＣ００６（北から）
　　3.ＳＣ００７（東から）
図版３　1.ＳＣ００７遺物出土状況（東から）
　　2.ＳＥ００１・００２土層断面状況（東から）
　　3.ＳＥ００１・００２（東から）
図版４　1.ＳＥ００３（南東から）
　　2.ＳＥ００４（北から）
　　3.ＳＸ００１（西から）
図版５　1.ＳＸ００１（西から）
　　2.ＳＸ００４遺物出土状況（東から）
　　3.ＳＰ１４３遺物出土状況（北から）
図版６　出土遺物１
図版７　出土遺物２
図版８　出土遺物３
図版９　出土遺物４
図版１０　出土遺物５

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 2
第２図　中園遺跡周辺地形図（1/5,000）…… 5
第３図　中園遺跡遺構配置図（1/200）…… 6
第４図　中園遺跡基本土層図（1/20）…… 7
第５図　竪穴住居跡ＳＣ００１実測図（1/60）…… 8
第６図　竪穴住居跡ＳＣ００１出土土器実測図１（1/4）…… 8
第７図　竪穴住居跡ＳＣ００１出土土器実測図２（1/3）…… 9
第８図　竪穴住居跡ＳＣ００１出土土器実測図３（1/3）…… 11
第９図　竪穴住居跡ＳＣ００２、不明土坑ＳＸ０２１実測図（1/60）…… 12
第10図　竪穴住居跡ＳＣ００２出土土器実測図（3・4：1/4、その他：1/3）…… 13
第11図　竪穴住居跡ＳＣ００３・００４、不明土坑ＳＸ０１６実測図（1/60）…… 14
第12図　竪穴住居跡ＳＣ００３出土土器実測図（1/3）…… 15
第13図　竪穴住居跡ＳＣ００５実測図（1/60）…… 16
第14図　竪穴住居跡ＳＣ００５出土土器実測図（1～3：1/4、その他：1/3）…… 17
第15図　竪穴住居跡ＳＣ００６実測図（1/60）…… 18
第16図　竪穴住居跡ＳＣ００７実測図（1/60）…… 18
第17図　竪穴住居跡ＳＣ００６・００７出土土器実測図（5～8：1/4、その他：1/3）…… 19
第18図　掘立柱建物跡ＳＢ００１実測図（1/60）…… 20
第19図　掘立柱建物跡ＳＢ００２実測図（1/60）…… 20
第20図　井戸ＳＥ００１～００４実測図（1/60）…… 22
第21図　井戸ＳＥ００１～００４出土土器実測図（18：1/4、その他：1/3）…… 22
第22図　土坑ＳＸ００１～００３・００５・００６実測図（1/40）…… 24
第23図　不明土坑ＳＸ００１～００６・０２３実測図（1/40）…… 25
第24図　不明土坑ＳＸ００７・００９～０１５・０１７実測図（1/40）…… 27
第25図　不明土坑ＳＸ０１８～０２０・０２２・０２４～０２７実測図（1/40）…… 28
第26図　土坑ＳＫ００１・００３・００４、不明土坑出土土器実測図１（7・9：1/4、その他：1/3）… 29
第27図　不明土坑ＳＸ００５・００８出土土器実測図２（23～25：1/4、その他 1/3）…… 30
第28図　不明土坑SX013～016、019～024・026・027出土土器実測図３（41:1/4, その他1/3）… 32
第29図　溝ＳＤ００１～００５実測図（1/60）…… 34
第30図　溝ＳＤ００１～００４出土土器実測図（7：1/4、その他 1/3）…… 36
第31図　土器群１・２出土土器実測図（1/3）…… 37
第32図　柱穴出土土器実測図１（1/3）…… 38
第33図　柱穴出土土器実測図２（33・34：1/4、その他：1/3）…… 39
第34図　その他出土土器実測図（1：1/4、その他：1/3）…… 40
第35図　出土石器実測図（2/3）…… 41
第36図　出土石器・鉄器実測図（1/2）…… 42

Ⅰ．はじめに

1．調査の経緯

令和３年１月、社会福祉法人サミックより飯塚市太郎丸 712-1 外５筆において老人ホーム建設の計画があることから、文化財に係る事前の照会文書が飯塚市教育委員会文化課文化財保護推進室（以下、市文化課）に提出された。事業予定地は周知の文化財包蔵地ではないが、工事内容から市文化課としては試掘調査が必要であると回答した。

令和３年１月、市文化課が試掘調査（１～４トレンチ）を実施したところ、地表面下約 0.15～0.45mで遺構（柱穴群）や遺物を含む包含層が確認された。また、発掘調査範囲を確定するために令和３年２月に再度試掘調査（５～８トレンチ）を行った。この調査の結果をもって、市文化課と社会福祉法人サミックで協議をおこない、事業計画により建物基礎は杭工事が行われるので、建物部分のうち、遺構が検出された西側部分で調査費用・調査期間において協議を行った。その結果、市文化課が発掘調査を実施することで決定した。

2．調査組織

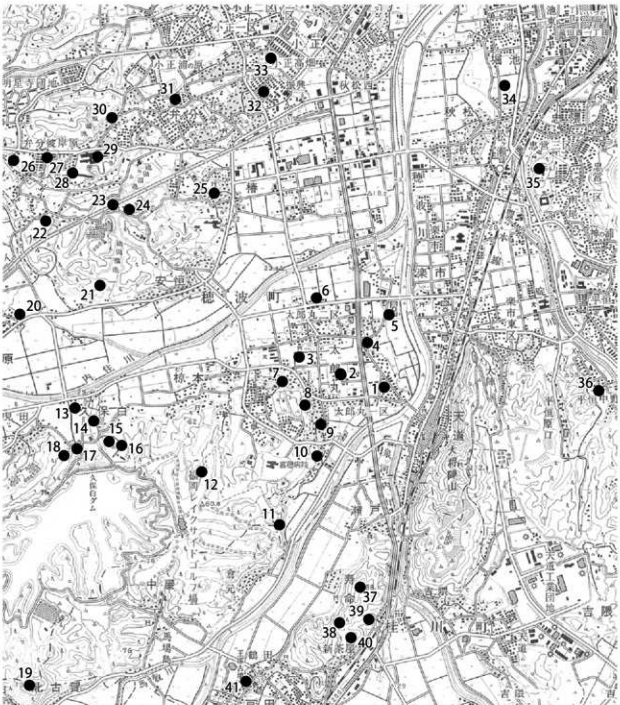
令和２・３・５年度の発掘調査に係る関係者は下記のとおりである。

〔飯塚市教育委員会文化課〕

教育長	武井　政一（令和２年～５年１０月）
教育長職務代理者	上田　敬子（令和５年１０月～）
教育部長	二石　記人（令和２・３年度）
	山田　哲史（令和５年度）
文化課長	坂口　信治
文化財保護推進室長	毛利　哲久（令和２年度）
	高橋　宏輔（令和３年度）
	渡邊　淳　（令和５年度）
文化財保護担当	柳山　範一（調査担当）
	八木　健一郎（調査・報告書担当）

発掘調査・報告書作成にあたっては、以下の方々に有益な御助言、御教示を得ました。記して感謝いたします。

宇野慎敏〔前行橋市歴史資料館長〕、杉原敏之・大庭孝夫〔福岡県教育委員会〕、吉田東明・岸本圭・小嶋篤〔九州歴史資料館〕、久住猛雄〔福岡市埋蔵文化財センター〕、原田智也・高木龍弘〔北九州市教育委員会〕、中村利至久〔（公財）北九州市芸術文化振興財団〕、山崎頼人〔小郡市埋蔵文化財センター〕、太田智〔宗像市教育委員会〕、（順不同、敬称略）



1.中園遺跡　2.後田遺跡　3.丸ノ内遺跡　4.高松遺跡　5.川西遺跡　6.鳥ノ巣遺跡　7.下屋敷遺跡　8.長福寺経塚
9.太郎丸本村遺跡　10.宝満宮古墳　11.中屋古墳群　12.西ノ浦上横穴墓群　13.原崎遺跡　14.久保白遺跡
15.森原遺跡　16.森原古墳群　17.道ヶ坂石棺墓群　18.久保白古墳群　19.城山古城跡　20.津原遺跡　21.油田遺跡
22.大門遺跡　23.スダレ遺跡　24.スダレ遺跡(墓地)　25.椿サコ遺跡　26.上の原遺跡　27.彼岸原遺跡
28.日上遺跡　29.労災病院遺跡　30.かにが坂溜池遺跡　31.小正西古墳　32.出口遺跡　33.日焼遺跡
34.堀池口ヶ坪遺跡　35.忠隈古墳　36.中野遺跡　37.金比羅山古墳　38.宮ノ上古墳　39.茶臼山古墳　40.大平古墳
41.王塚古墳

第１図　　周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅱ．地理的・歴史的環境

1．地理的環境

平成18年3月26日に、飯塚市、嘉穂郡穂波町・筑穂町・庄内町・頴田町の1市4町が合併して誕生した新「飯塚市」は、人口約13万人、面積約214ｋ㎡を誇る筑豊地方最大の都市である。北は直方市・鞍手郡小竹町・宮若市、東は田川市・田川郡福智町・田川郡糸田町、南は嘉麻市・嘉穂郡桂川町・筑紫野市・朝倉郡筑前町、西は糟屋郡篠栗町・糟屋郡須恵町・糟屋郡宇美町と接している。

飯塚市が位置している嘉穂盆地は、西を三郡山地、南を古処山地、東を金国・戸谷ヶ岳山地に囲まれており、盆地内には古処山地に水源を発する嘉麻川と三郡山地に水源を発する穂波川が合流した遠賀川が北流している。本地域の地質は、古生代の呼野層群・三郡変成岩、中生代の花崗岩類が中央部や東西の丘陵地帯の基盤となる。これらのうち、呼野層群は北九州市門司区の企救半島から三郡山地にかけて分布し、市域北西の笠置山周辺部にも見られる。大きく上層・中層・下層に分かれ、上層は平尾台石灰岩、中層には輝緑凝灰岩や砂岩、チャート、粘板岩が、下層には凝灰岩質粘板岩、緑色凝灰岩質粘板岩がある。いわゆる立岩産石包丁は、この呼野層群中の輝緑凝灰岩を石材として使用している。新生代の古第三紀には夾炭層である直方層群が盆地中央部に堆積するが、この分布域が近代に国内石炭生産の半数を産出した筑豊炭田である。

今回報告する中園遺跡は、いずれも嘉穂盆地の中央部に位置し、遠賀川水系である穂波川と内住川に挟まれた久保白丘陵北麓の縁辺部に所在している。

2．歴史的環境

中園遺跡の位置する穂波川と内住川の合流地点付近の平野部は、これまで遺跡の分布が希薄な所として認識されていた。しかし、近年、この周辺の開発に伴い当遺跡の他にも後田遺跡や丸ノ内遺跡といった新たな遺跡が調査されている。さらに、畑田遺跡でも試掘調査によって古墳時代の集落跡が確認されており、遺跡が営まれた時期から後田遺跡や丸ノ内遺跡との関連性も考えられる。これらの事も踏まえ、ここでは中園遺跡が営まれた古墳時代から古代・中世を中心に本地域の動向について概観する。

本遺跡の南約2ｋｍには王塚古墳をはじめとする寿命丘陵上の古墳群が分布している。古墳時代前期から後期にかけて、北から金比羅山古墳、宮ノ上古墳、大平古墳、王塚古墳、天神山古墳のほか、ホーケントウ古墳、北古賀古墳といった7基の前方後円墳が連続して築造されている。王塚古墳は後期中葉頃の前方後円墳で、装飾古墳の白眉として著名である。復原全長86mを測り、嘉穂盆地最大規模で、『日本書記』安閑天皇二年（535）条に記載のある「筑紫穂波屯倉」との関連を考える上でも重要な古墳である。

一方、中園遺跡が所在する穂波川と内住川に挟まれた久保白丘陵上には、森原古墳群、中屋古墳群、西ノ浦上横穴群などが分布している。森原古墳群に属する森原1号墳は全長約28mと小規模ながら古墳時代中期末頃の前方後円墳である。この丘陵に所在する前方後円墳は森原1号墳のみで

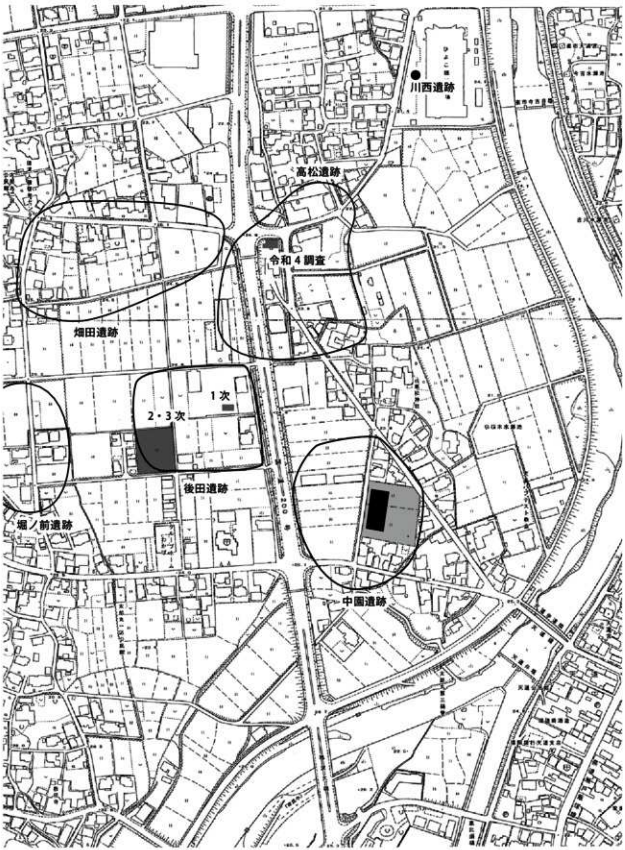
あり、穂波川を挟んで南側に南北に広がる寿命丘陵の古墳の様相とは大きな格差が見受けられる。古墳時代後期になると西ノ浦上横穴群（42 基）が、この丘陵の東側に造営される。この横穴墓群は横穴式石室に構造が類似した羨門石組を用いた横穴墓が多く、出土遺物についても心葉形杏葉や雲珠が出土している。そのため、被葬者として軍事組織等に編成された集団のものとして考えられている。

7 世紀末から 8 世紀初頭には久保白丘陵南西の麓に古代寺院である大分廃寺が創建される。平成 3～7 年度の発掘調査により、寺域の規模については東西 102m、南北長 94m、伽藍配置は法起寺式もしくは観世音寺式であることが明らかとなっている。創建瓦は新羅系古瓦で、豊前地域に基盤を持つ渡来系氏族との結びつきを窺わせる。また、この大分廃寺の西約 1kmには、神亀三年（726）に創建されたと伝えられる大分宮が所在している。大分宮の創建当時は「穂波宮」とされ、その後に「大分宮」と呼ばれ、現在のように「大分八幡宮」という呼称は近世以降に用いられたとされる。大分宮の祭神である八幡神は豊前地域における渡来系氏族の信仰を基盤の一つとして広まった神であり、大分廃寺と同様に同時期に豊前地域との強い関係の中で創建されたことが窺い知れる。

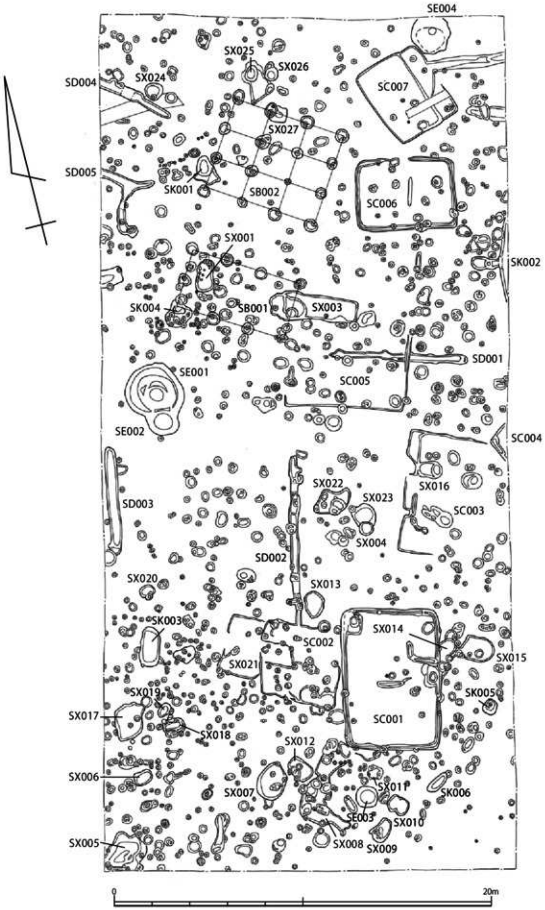
10 世紀前半の『延喜式』によれば、穂波郡内の大宰府官道沿いには駅家である伏見駅が置かれていたことが知れる。「伏見」の地名は現在残っておらず、「和名類聚抄」にも記載がないため遺称地を知ることができないが、天慶三年（940）の「筑前国穂浪郡司解条」に「伏見郷高田村」と記載があり、「高田村」の高田は飯塚市高田地区に比定することが可能である。この高田地区は、観世音寺領の荘園として墾田地系荘園の著名な高田庄が位置するところである。この付近において昭和末期から平成にかけて圃場整備事業に伴う発掘調査が行なわれ、佛田遺跡と隣接する大坪遺跡から中世前期の掘立柱建物跡が合わせて 31 棟、箱掛遺跡から中世前期の土坑が 250 基確認されており、久保白丘陵北面（内住川流域）に中世の人々の活動の拠点があったことを窺い知ることができる。また、古代官道のルートも内住川沿いに高田地区を通り、太郎丸地区へ向かうコースが推定されており、この高田地区から太郎丸地区にかけては、古代から中世にかけて多くの人や物が行き交う場所であったことであろう。また、この久保白丘陵の北端からは、平安時代末頃のものと推定される経筒が長福寺経塚より発見されている。

写真 1　西ノ浦上横穴群全景

写真 2　唐草文透心葉形杏形
（西ノ浦上横穴群 14 号墓出土）



第２図　中園遺跡周辺地形図（1/5,000）



第３図　中園遺跡遺構配置図（1/200）

Ⅲ．中園遺跡の調査

1．調査の方法

中園遺跡は老人ホーム建設予定地の建物部分を対象とした発掘調査で、対象面積約4,285㎡のうち試掘調査で遺構が確認された西半分の約1,000㎡を調査対象に令和3年2月17日より開始した。まず、バックホーによる表土等除去作業をおこない、地表面下約0.2～0.25mの深さで基盤層（黄褐橙色粘土層）が検出された。3月15日より人力による遺構検出作業を基盤層上面にて開始した。調査区には地形に合わせて測量杭を設定した。この杭を基準に遺構の割付をおこない、20分の1・100分の1の図面を作成した。遺構の登録については略記号を使用した（例言参照）。

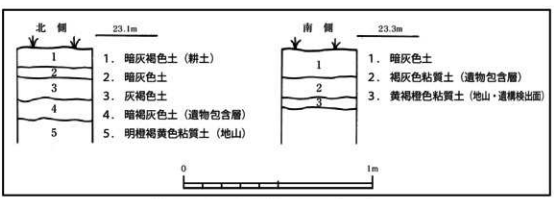
調査の結果として、遺構としては竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡2棟、井戸4基、土坑6基、不明土坑27基、溝5条、ピット等が確認された。また、遺物としては縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、青磁等が遺物コンテナ13箱分出土した。調査は6月18日に全作業を終了した。

2．遺構と遺物

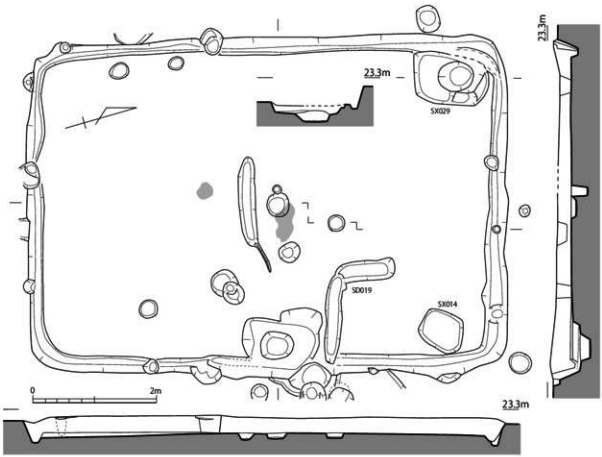
1）竪穴住居跡

SC001（図版1・2、第5図）

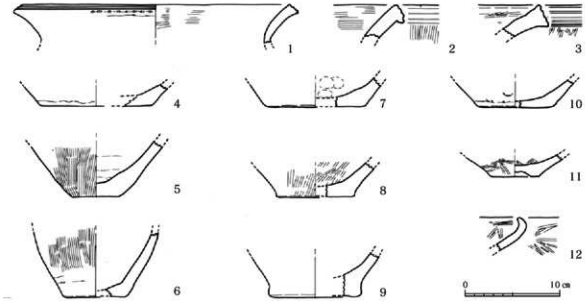
調査区南東隅付近に位置し、SC006と同様に各辺を方位に揃えるように位置するが、SC006とは90度違えている。5.1×7.4mの隅丸長方形を呈し、深さは東辺で0.3m、西辺で0.2mを測る。四周に連続的に周壁溝を巡らせ、溝底幅にはむらがあるが最大値は0.2mで、床面からの深さは最大で0.1mとなるが、東辺の屋内土坑付近では5㎝ほどの段が付いてやや深くなる。中央付近の直径0.35m、深さ0.1mほどの小穴が炉跡と思われ、その壁面の一部が赤変硬化し、赤辺部は東側へ連続するが、硬化した範囲は炉壁のみである。炉跡に接する直径0.1m、深さ0.25mの小穴には粘土が詰まっていた。また、炉跡の南に東西方向の幅最大幅0.25m、長さ1.3m、深さ0.1mの溝が置かれ、床面はほぼ水平であるがその東端はさらに細くなって傾斜していた。この溝本体の部分にはすべて粗砂が詰まっていて特殊な性格を思わせる。また、溝の南側の床にも一部赤変した部分がある。東辺際に接しておかれた屋内土坑は南北長1.2mの規模で、内部は二段となって上段は0.1



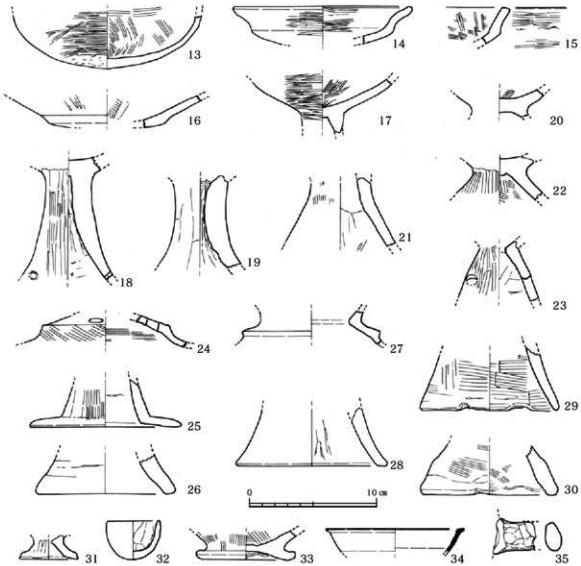
第4図　中園遺跡基本土層図（1/20）



第５図　竪穴住居跡ＳＣ００１実測図（1/60）



第６図　竪穴住居跡ＳＣ００１出土土器実測図１（1/4）



第７図　竪穴住居跡ＳＣ００１出土土器実測図２（1/3）

m、下段は 0.2mほどの深さであった。周壁溝との関係は明瞭でなかったが、溝に水が入った場合には屋内土坑へ流れたものと思われる。屋内土坑の北辺から 0.1mほどの距離を置いて幅 0.25m、深さ 0.1mの溝が東西方向に 1.3m延び、その先で南北方向に向きを変えて 0.9mの長さに延びる。南北方向の部分も幅は道程で、深さは５cmほど浅くなっている。この溝は直線的で、かつ住居跡の辺を意識しておかれていて計画性を思わせる。この住居跡ではほかに２基の土坑が見られた。北東隅の土坑の形状は不整方形といってよく、深さは最大で 0.2mほどであった。北西隅の土坑は床面隅にはめ込まれたような形で配置されるが、湧水などで不明瞭で終わった部分がある。土坑は 0.8×1.1mほどの長方形に近い平面形で、屋内土坑と同様に二段となっていて、上段は 0.1m、下段は 0.2mほどの深さとなる。上段の北半は乱れているが、これが本来の形状かどうかは不明である。また主柱穴は不明である。

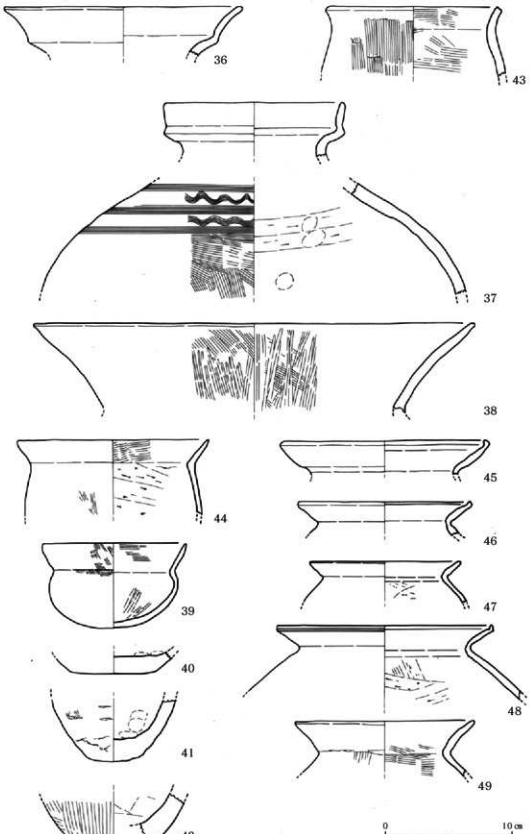
出土土器（図版６、第６～８図）

1～10は弥生土器である。1～3は甕口縁部である。1は口縁下端部をつまみ出して口縁端面を拡張させている。口縁端面には沈線に近い2条の凹線、口縁下端面には刻み目を施す。口縁内面にはヨコハケを施す。2は口縁下端部をつまみ出して折り返し、口縁端面に上下は沈線に近く、中は不明瞭な3条の凹線を施す。口縁部外面にはタテハケ、内面にはヨコハケを施す。3は口縁上端部をつまみ出して下端部は外方へ拡張させている。口縁端面に下2条は細いが4条の凹線を施す。内外面にミガキを施す。4～9は甕底部である。5は外面全体にタテハケを施す。6は外面タテハケを施すが、底部付近はナデを施す。8は内外面ともハケを施す。9は底面の厚さ2.1 cmを測る。10・11は壺底部である。11は上げ底状を呈し、内外面ともミガキを施す。12は高杯杯部口縁部である。口縁を丸く折り返して端部は丸くおさめる。内外面ともミガキを施す。

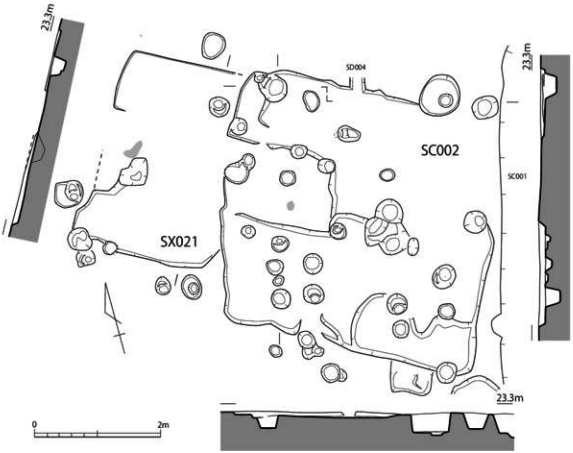
13～33・35～49は土師器である。13は鉢で口縁部を欠損している。内外面ともミガキを施すが、底面外面はケズリを施す。14～30は高杯である。14～16は杯部である。14は屈曲部が丸く、そこから外反して口縁端部を丸くおさめる。15は屈曲部がやや明瞭でそこから外方に直線的口縁部が延びる。口縁端部に面を有する。16は口縁部が直線的に大きく開く。17は杯底部と脚上部である。内外面ともミガキを施す。脚部は付加法で付けているとみられる。18～30は脚部である。18・19は柱状の脚部を有し、外方に開く。18は脚部下位に円形の透孔を有する。22は円盤充填法である。23は脚中位に円形の透孔を有する。24・27は脚部中位で屈曲して、裾部へ開く。24は屈曲部上位に円形の孔を有する。26・28・29・30は脚部からほぼ直線的に裾部が開く。脚端部が26・28・30は面を有するが、29は丸くおさめる。31・32は小型手捏土器で31は脚部である。32は椀である。33は脚付椀の脚である。内外面にハケメを施す。35は甑底部の桟の一部で、底部の接合部分が見られる。36～42は壺である。36・37は2重口縁を呈し、36は外方に開き、37は上方に短く開く。37は体部上半に櫛描直線文を3条、その間に波状文を施す。体部中位から下はハケ、体部内面はケズリを施す。38は大型の広口壺口縁部である。内外面ともミガキを施す。39は小型丸底壺である。口径11.4 cm、器高6.8 cmを測る。40～42は底部である。底部径からいずれも器高15 cm程度とみられる。43～49は甕である。43・44は体部があまり開かず、43は口縁部もわずかに開いて口縁端部に面を有する。内外面にハケを施す。44は屈曲部を有して外方に開く。口縁端部はうすい。体部内面にケズリを施す。45は口縁端部を内側へつまみ出し、口縁部もやや内湾させている。46・48は口縁部が直線的に外方へ開き、口縁端部を上方へつまみ出している。48は口縁端部外面に1条の沈線を施す。47は口縁端部がつまみ出していないが、直線的に外方へ開く。47・48は頸部よりやや下からケズリを施す。49は他より頸部がしまり、口縁部が長く外反しながら開く。外面は頸部下、内面は頸部付近以下にハケを施す。34は須恵器高杯の杯口縁部である。

SC002（第9図）

調査区南端付近の中央部にあり、SX021と重複してそれに後出すると判断した。またSD004とも重複するがその先後関係は確認できなかった。一辺40～42mのやや歪んだ方形プランで検出したが、深さはどこも0.5 cm前後の浅いものであった。西辺に近いところに矩形の高まりがあるが、この上面は遺構検出面とほぼ同じ高さで、その東端の段差はやはり0.5 cm前後である。この中央やや南に熱を受けて赤変した部分があるが、硬化は認められない。竪穴住居跡である場合は断面に示した3基のやや深い柱穴が主柱穴と思



第８図　竪穴住居跡ＳＣ００１出土土器実測図３（1/3）



第９図　竪穴住居跡ＳＣ００２、不明土坑ＳＸ０２１実測図（1/60）

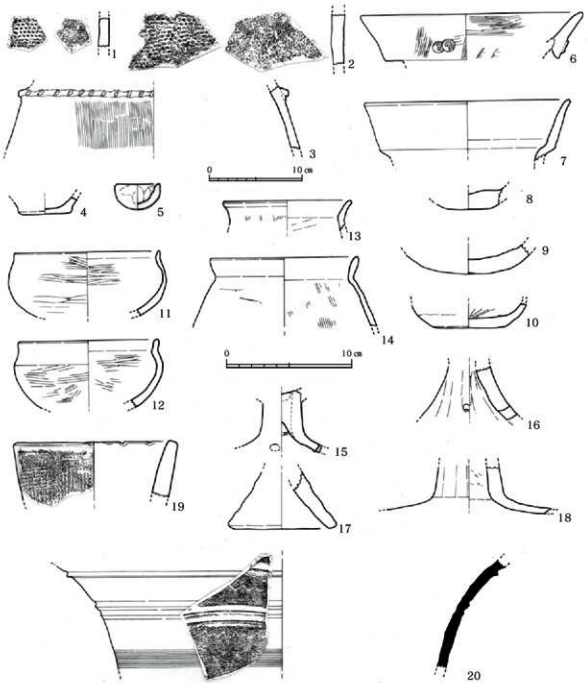
われ、南北 33m、東西 26mの方形に近く配置された南東隅付近にも同様の深さの柱穴があって４本を想定できるが、炉跡や屋内土坑といった構成遺構は不明である。床面に赤変した部分があるが、大きく東に偏していて炉跡ともカマド跡とも断じ難い。

出土土器（図版6、第10図）

１・２は縄文土器の押型文土器で外面横位の楕円文と山形文を施文する。２は外面横位の楕円文を施文する。

３・４は弥生土器の甕である。３はやや大型の甕体部で体部上位に刻み目を有する突帯がある。外面の突帯下はタテハケを施す。４は小型の甕の底部である。

５～19は土師器である。５は手捏型土器の鉢である。６～10は壺で、６・７は２重口縁部を有する。６は内外面にミガキを施し、外面に半裁竹管状の工具による刺突文を配した円形浮文を２つ重なり合うように貼り付けている。８～10は壺底部である。11・12は椀である。11はわずかに上方へのばし、口縁端部をうすく仕上げる。12 は少し屈曲して口縁端部は丸くおさめる。内外面ともミガキを施す。13・14は甕である。いずれも屈曲するがわずかに外方へ開く。15～18は高杯脚部である。15 は脚柱が中実で、脚裾部が開く。脚裾部付近に円形の孔を入れている。16・17 は脚部上位から開き、下位に円形の孔を入れている。18 は脚部が中空で、大きく開く。脚内面にケズリを施す。19は甑類とみられる。器壁が厚く、外面ヨコハケののち、全体的にタタキを施す。



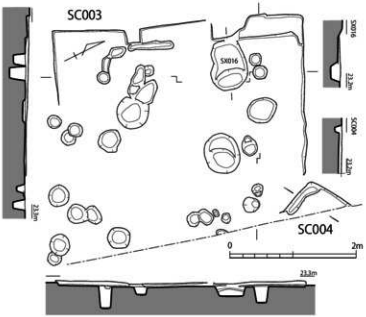
第10図　竪穴住居跡ＳＣ００２出土土器実測図（3・4：1/4、その他1/3）

20 は須恵器大甕の口縁部で、外面カキメの後、上部に１条の突帯、中位に３条の凹線を、上下に波状文を施す。

SC003（第11図）

SC005の南東に近接し、北辺2.0m、西辺6.4m、南辺1.9mの規模で検出した。西辺には矩形となる長さ0.3～0.5mの凹凸があって珍しいが、住居内に張り出した先端部に小溝や５cmに満たない低い段が

直線的に配置されていることから意味があるのであろう。北西隅の深さは 0.1m、0.05m弱で、南西隅の深さは 0.1m。これも炉跡の痕跡は確認できないが、南北断面に示した柱穴間および南西柱穴と南東調査区境付近のやや大きな柱穴が南北、東西各 4.0 mと等間であり、北西柱穴と南東柱穴の深さがほぼ等しいことからこれら 3 基が主柱穴を構成するとして間違いない。但し、配置は厳密な方形とはならない。南辺に接するいわゆる屋内土坑はない。やや大型となる 3 基の土坑は重複するものであろう。



第 11 図　竪穴住居跡ＳＣ００３・００４
不明土坑ＳＸ０１６実測図（1/60）

出土土器（図版6、第 12 図）

1 ～4 は弥生土器である。1 は甕口縁部でくの字状に開く。ヨコナデによって口縁端部を形成している。2 は高杯の杯部から内側へ屈曲する口縁部とみられる。内外面にハケを施す。3 ・4 は甕底部とみられる。3 は内外面、4 は外面にハケを施す。

5 ～ 19 は土師器である。5 ～7 は甕である。6 は体部が開かず、口縁部も上方にのびている。外面にハケを施す。8 ・9 は高杯の杯底部と脚部上位である。10 は小型手捏型土器鉢である。11 は小型の鉢である。12 ・13 は椀である。12 は口縁部がわずかに開き、13 は高台を有する。内外面ともミガキを施す。14 ～16 は甑である。14 はわずかに外方へ開き、15 はほぼ直線的にのびる。口縁端部は 14 が丸く、15 は面を有する。16 は把手である。やや短い。17 ～ 19 は製塩土器で鉢型を呈する。うす手の造りで指オサエがみられる程度である。復元口径 5.0 ～ 6.8cm を測る。

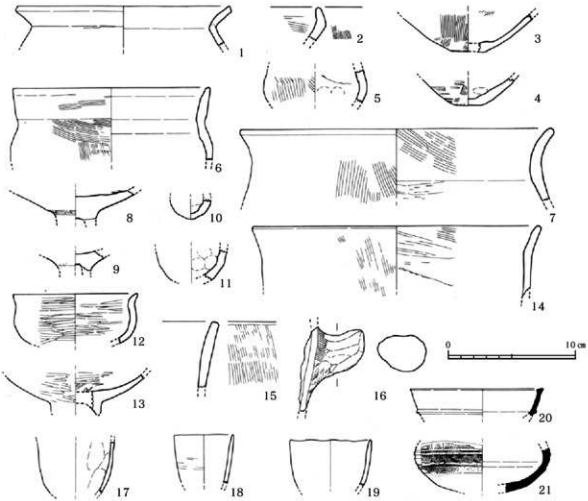
20 ・21 は須恵器である。20 は高杯口縁部とみられる。杯底部の稜が明瞭である。縁端部や突帯がシャープである。21 は壺類の体部である。体部中位の上下に 2 条の沈線を配し、沈線間を 1 条の突帯状に造り上げる。突帯間に波状文を施す。

ＳＣ００４（第 11 図）

SC003 の北東部で重複する位置にある。コーナーとその両辺の 1mほどを確認したのみであるが、一部に周壁溝が残ることや大きさから住居跡としてよいものと思われる。深さは0.1m、周壁溝の深さも 0.1mである。

ＳＣ００５（第 13 図）

調査区中央付近のやや北に位置する。東辺 4.0m、南辺 6.1m、西辺 0.7mの長さで最大 0.1mの深さの落込みをコ字形に検出し、東辺の一部で周壁溝と思われる幅0.2m、深さ 0.1mに満たない小溝を認め



第12図　竪穴住居跡ＳＣ００３出土土器実測図（1/3）

たことから住居跡の痕跡と判断した。炉跡を確認できていないが、東西溝 SD001 と重複する直径 0.6m、深さ 0.3mの円形落込みを炉跡として、南辺に近い小孔２基を伴う屋内土坑、断面に示した柱穴などを主柱穴とすれば構造的には通常の住居跡となる。その場合は南北長 5mほどに復元でき、北辺は SX003 に重複するようである。南東の主柱穴は不明である。

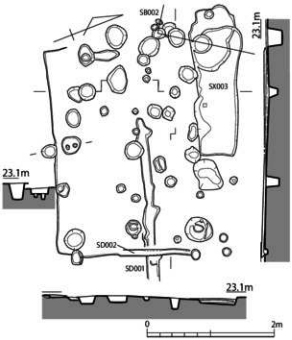
出土土器（第14図）

１～３は弥生土器である。１・２は壺とみられる。１は体部中位に３条の突帯を有する。２は底部である。３は甕口縁部で外面に明瞭な屈曲部を有して外方に開く。

４～19は土師器である。４は壺とみられる。５～８は甕である。５・６は明瞭な屈曲をもたずにやや外上方へ口縁部が開く。内面はケズリ、６は外面ミガキを施す。７は屈曲部を２カ所有するが、口縁部が短く開く。８は明瞭な屈曲部を有して開く。９～14は高杯で、９は杯底部が屈曲して大きく外反する。10・11は杯底部・脚部上端である。12・13は脚部で 12 は脚部が直線的に開き、脚裾部が大きく開く。杯部とは円盤充填で接合する。13はやや内湾する。14は脚裾部が屈曲して開く。脚端部はうすく仕上げる。15～19は椀である。15・16は口縁部が短く開く。17・18

は体部からそのまま口縁部がのびている。17 は口縁外面にカキメを施す。底部付近はケズリを施す。18 は外面にミガキを施す。19 は口径 17.3 ㎝、器高 4.5 ㎝を測る。平坦な底部を有し、そこから直線的に口縁部までのびる。20・21 は小型手捏型土器で鉢である。22 は小型の甕類とみられる。

23 ～ 29 は須恵器である。23・24 は杯蓋である。24 は口縁外面に沈線を有する。23・24 ともに口縁端部内面に段を有する。25 は杯身である。26 は無頸壺である。体部外面にカキメを施す。27 は壺類の口縁部とみられる。28 は高杯脚部である。脚部中位に長さ 3.6 ㎝の長方形の透孔を 3 方向に入れ、カキメを施す。29 は大甕口縁部である。口縁端部を短く折り返して端面を有する。外面には櫛描文の上下に波状文を施す。口縁部内面にはカキメを施す。



第 13 図　竪穴住居跡ＳＣ００５実測図（1/60）

ＳＣ００６（図版 2、第 15 図）

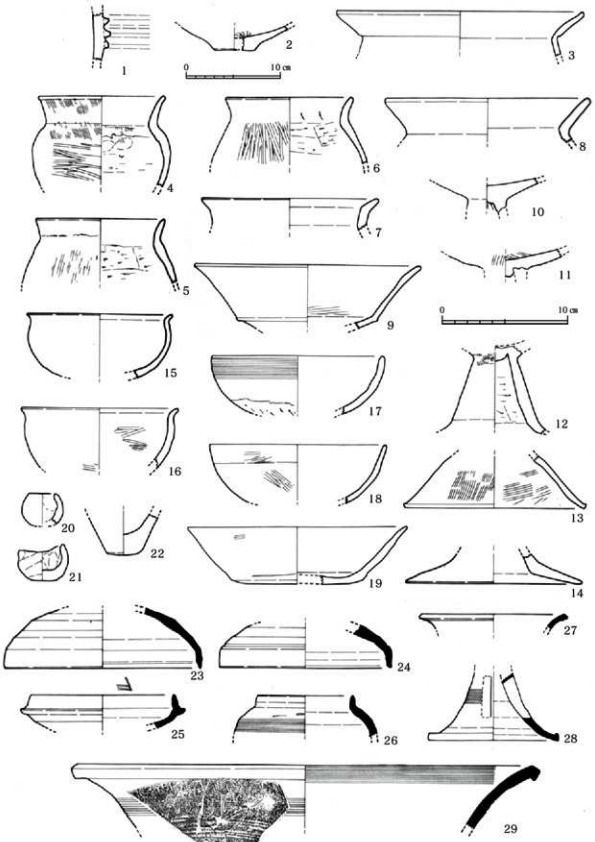
SC007 の南に近接する 3.7×5.2m の隅丸長方形の周壁溝から住居跡を想定した。溝の深さは 0.1m ほど、北辺で一部確認した壁の立ち上がりは 15 ㎝に過ぎない。各辺は方位に近くなる。これも痕跡を示す痕跡はなく、主柱穴は 4 本を想定できるが、それぞれ深さが揃わず特定は難しい。北辺に沿う方形に近い土坑、南辺に近い円形土坑はいずれも各辺の中心を同じ程度はずれていて、長軸 0.5m、深さ 0.3m ほどの同じような規模でもあって関連がありそうであるが、通常であれば南辺に沿う土坑が出入口を想定できるものである。なお、中央付近に最大幅 0.1m、長さ 1.6m の規模で砂が詰まった溝状の落込みがある。断ち割っておらず、深さ、意味などは不明である。

出土土器（図版 6、第 17 図）

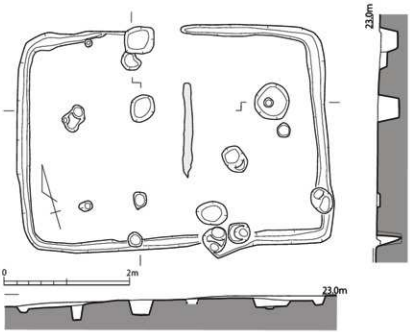
1 ～ 4 は縄文土器である。1 ・ 2 押型文土器で外面横位の楕円文を施文する。2 は口縁部外面横位、内面縦位の楕円文を施文する。3 ・ 4 は条痕土器で 3 は口縁部で外面に縦方向の条痕、4 は体部片で内外面に横方向の条痕を施す。

5 ～ 8 は弥生土器である。5 ・ 6 は底部で、5 は甕、6 は壺の底部と見られる。5 は外面、6 は内外面にハケを施す。7 ・ 8 は高杯口縁部で、口縁端部を内側へ折り返している。7 は口縁端部に面を有し、8 は口縁端部をややうすく仕上げる。

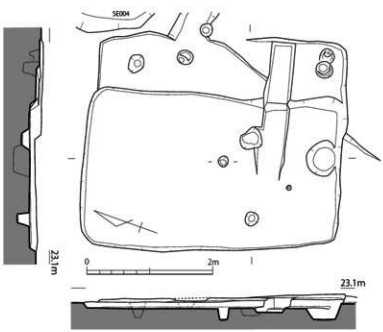
9 ～ 11 は土師器である。9 は小壺類の底部とみられる。10・11 は壺の口縁部で、10 は屈曲部を有し、やや外上方に開いて口縁端部を丸くおさめる。11 は上方にのびて口縁端部に面を有する。内外面ともハケを施す。



第14図　竪穴住居跡ＳＣ００５出土土器実測図（1～3：1/4、その他：1/3）



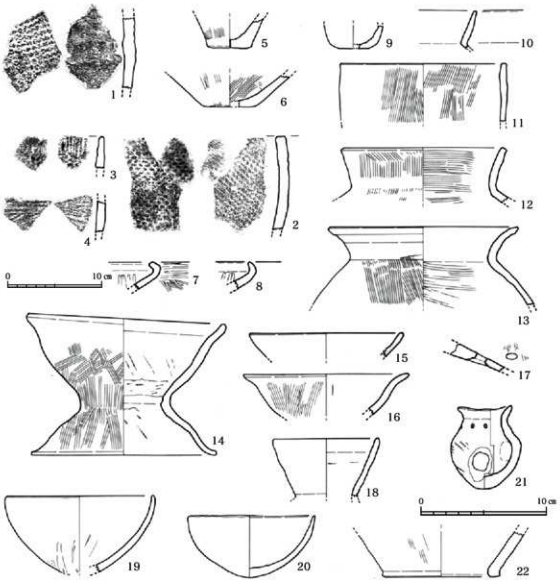
第 15 図　竪穴住居跡ＳＣ００６実測図（1/60）



第 16 図　竪穴住居跡ＳＣ００７実測図（1/60）

ＳＣ００７（図版２・３、第 16 図）

調査区北東隅に位置する。平面形は 3.6～3.7×4.2～4.4m の隅丸長方形を呈し、一方の長辺に沿って幅 1m、高さ 0.1～0.15m のベッド状遺構が設置される。南辺に沿う土坑は辺の中央に配置されることが通常であるが、ここではベッド状遺構を度外視した場合には大きく東側に偏していて、それを含めた場合にはなお若干東に偏しているとはいえ土坑内に辺の中心が収まることから、ベッド状遺構は一辺のみに付されたものと思われる。東辺、西辺ともに深さは 0.1 m に満たない。ベッド状遺構を伴う住居跡では、これも通常では

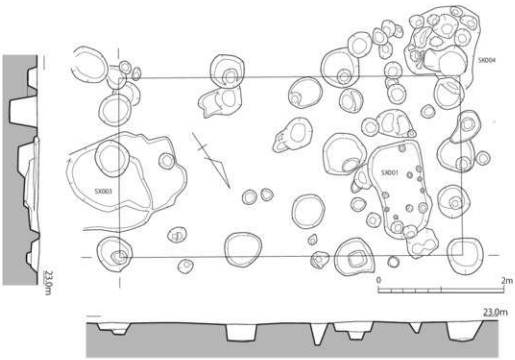


第17図　竪穴住居跡ＳＣ００６・００７出土土器実測図（5～8：1/4、その他1/3）

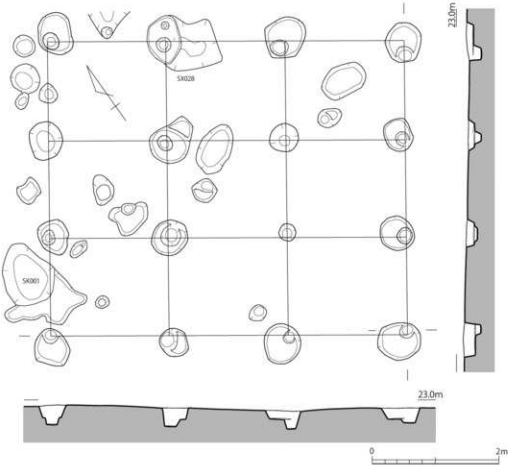
中央付近に炉跡を置き、それを２本で挟むあるいは４本の主柱穴で矩形に囲むのであるが、ここでは炉跡を示すような痕跡はなく、そのような柱穴配置も認められない。なお、幅0.6m、深さ0.2mほどの直線的な溝と重複し、住居跡内に試掘溝がある。

出土土器（図版６・７、第17図）

12～22は土師器である。12は直口壺でゆるやかな屈曲部をもち、やや外上方に開いて口縁端部に面を有する。外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。13は甕で頸部の屈曲は明瞭でない。口縁端部をヨコナデによって作り出し、外面に口縁端部を平坦に整えている。体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケを施す。14は器台である。口径16.8cm、器高11.0～12.0cmを測る。上部はやや内湾させながら、口縁部を少し外反させて口縁端部を上方に向けて丸くおさめる。脚部も内湾させながら、脚裾端部は外方へ面を持たせる。外面は口縁部付近がナデ、以下はハケを施す。内面は



第 18 図　掘立柱建物跡ＳＢ００１実測図（1/60）



第 19 図　掘立柱建物跡ＳＢ００２実測図（1/60）

中位から下はケズリを施す。15～17は高杯で15・16は杯部である。15は口縁部がやや内湾して丸くおさめる。16は杯部を内湾させて口縁部が外反する。17は脚部片で裾部まで開く。円形の透孔を入れている。18は壺口縁部で頸部からやや外上方にのびて、口縁部を上方に丸くおさめる。19・20は鉢である。口径12.4～10.7cm、20は器高が5.2cmを測る。19は底部付近にはケズリを施す。21は小壺である。口径4.5cm、器高7.0cmを測る。頸部に部分的に竹管文を施す。体部下半に穿孔を施す。22は甑の底部で単孔とみられ、復元底径9.9cmを測る。

2）掘立柱建物跡

SB001（第18図）

調査区北側で検出された3×2間の掘立柱建物跡で、北側桁行長5.75m、西側梁行長3.0mを測る。柱間は北側桁行については西から1.8m、1.9m、2.1m、西側梁行については北から1.5mの等間となる。柱掘方は0.55～0.65mの円形で、深さは0.2～0.35m程度である。

SB002（第19図）

SB001の3.5m北側で検出された3×3間の総柱建物跡で、SB001と方位をそろえている。北側桁行長6.0m、西側梁行長4.95mを測る。柱間は北側桁行については2.0mの等間、西側梁行については北から1.7m、1.65m、1.65mとなる。柱掘方は0.3～0.7mの円形で、深さは0.2～0.35m程度である。

3）井戸

SE001（図版3、第20図）

調査区西側で検出された井戸でSE002を切っている。円形を呈し、3.0×2.2m、深さ0.9mを測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（図版7、第21図）

1～6は須恵器である。1～4は椀である。1は高台裾がやや外方に出る。2は高台が短い。3は高台から底部が外方にのびて屈曲して立ち上がる。4は高台から湾曲して立ち上がる。5・6は皿である。5は底面を有して大きく広がる。6は口縁部が短く開き、口径14.2cm、器高1.9cmを測る。

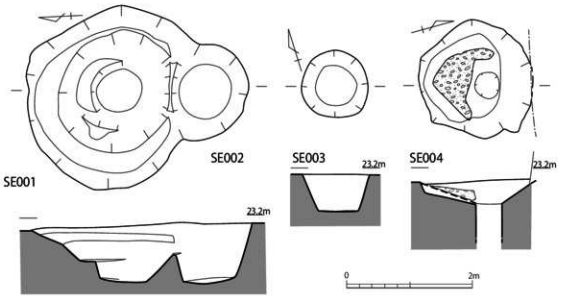
7～9は土師器皿である。7は小型で復元口径8.0cm、器高1.0cmを測る。8は底部がやや湾曲する。9は底部が平坦で復元口径13.3cm、器高2.7cmを測る。

SE002（図版3、第20図）

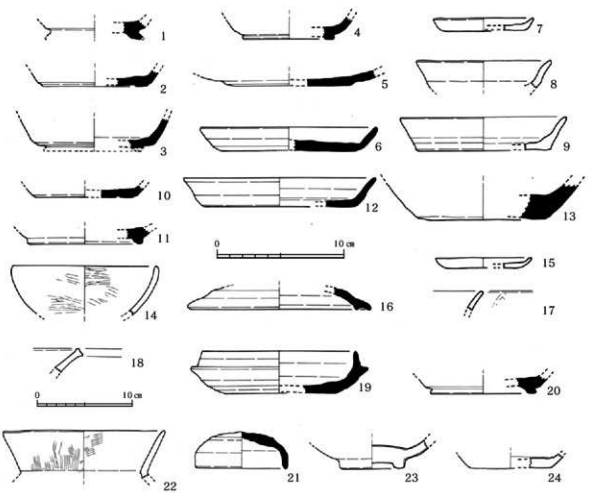
調査区西側で検出された井戸でSE001に切られている。円形を呈し、1.3×1.25m、深さ0.96mを測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（図版7、第21図）

10～13は須恵器である。10・11は椀で、10は高台が短い。11は裾端部が丸いが高台を有する。12は皿である。復元口径15.4cm、器高2.3cmを測る。13は壺類の底部である。底面は厚い。



第20図　井戸ＳＥ００１～００４実測図（1/60）



第21図　井戸ＳＥ００１～００４出土土器実測図（18：1/4、その他：1/3）

ＳＥ００３（図版4、第20図）

調査区南側で検出された井戸である。円形を呈し、径 1.1×m、深さ 0.6mを測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第21図）

14は土師器である。14は椀である。15は小皿である。復元口径 7.6cm、器高 0.8cm を測る。16は須恵器杯蓋である。復元口径 14.7cm を測り、かえりを有する。17は青磁碗口縁部である。外面に連弁を有する。

ＳＥ００４（図版4、第20図）

調査区北西で検出された井戸である。円形を呈し、径約 1.9m、深さ 0.3mの土坑を呈し、その中央に径 0.45m、深さ 0.55m以上の井戸がある。南側に石組を施す。

出土土器（第21図）

18は弥生土器である。ヨコナデによって口縁端部上下端をつまみ出している。19 ～ 21は須恵器である。19は杯身で復元口径 12.3cm、器高 3.4cm を測る。口縁端部内面に段は有していない。20は椀でやや外方に開く高台を有する。21は壺類の蓋とみられる。口径 7.2cm、器高 2.9cm を測る。22は土師器壺口縁部である。内外面ともにハケを施す。23は青磁椀の底部で高台を有する。24は白磁底部である。底部内面に見込みを有する。

４）土坑

ＳＫ００１（第22図）

調査区北西側で検出された土坑である。不整円形を呈し、長軸 1.5m、短軸 0.86m、深さ 0.24mを測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第26図）

１・２は土師器である。１は甕の口縁部で外反させて丸くおさめる。２は小型手捏型土器鉢である。

ＳＫ００２（第22図）

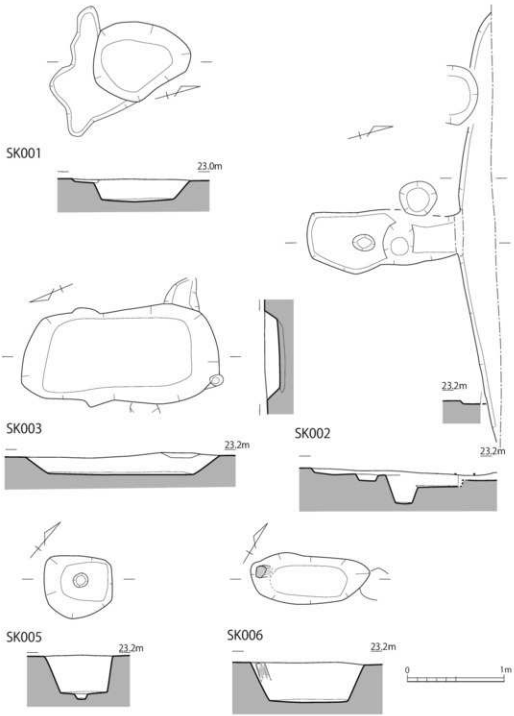
調査区北東で検出された土坑である。隅丸方形を呈し、長軸 1.6m、短軸 0.66m、深さ 0.14mを測る。底面は平坦を呈する。

ＳＫ００３（第22図）

調査区南西で検出された土坑である。隅丸方形を呈し、長軸 2.14m、短軸 1.08m、深さ 0.23mを測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（図版7、第26図）

３は甕底部である。４は須恵器杯身である。内面にヘラ記号を有する。５・６は青磁である。６は外面に連弁文を有する。



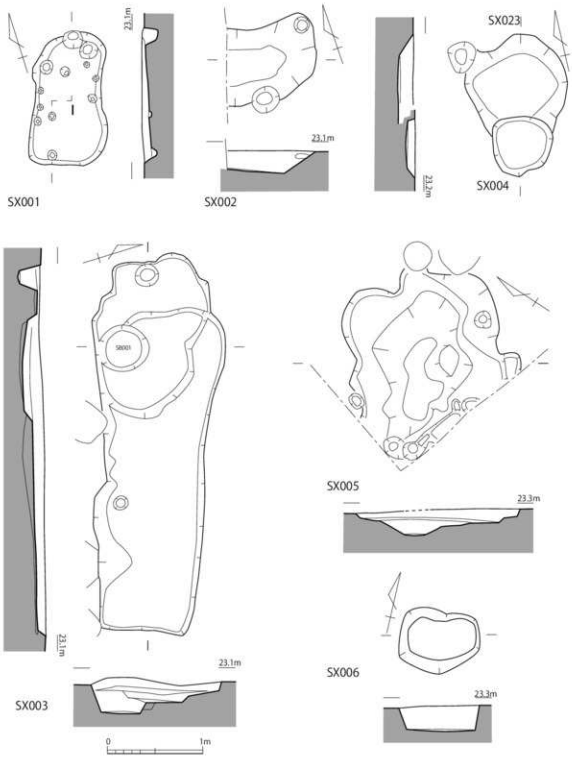
第22図　土坑ＳＫ００１～００３・００５・００６実測図（1/40）

ＳＫ００４（第18図）

調査区中央、SB001の南西で検出された土坑で、SP093に切られている。平面形態は不正楕円形状で長軸1.5m、短軸1.15m、深さ0.04～0.17mを測る。底面は平坦を呈する。

ＳＫ００５（第22図）

調査区南東で検出された土坑である。不整方形を呈し、長軸0.74m、短軸0.68m、深さ0.4mを測る。底面中央に径0.15m、深さ0.06mの円形を呈する柱穴を有する。



第23図　不明土坑ＳＸ００１～００６・０２３実測図（1/40）

ＳＫ００６（第 22 図）

調査区南東で検出された土坑である。楕円形を呈し、長軸 1.28m、短軸 0.54m、深さ 0.43m を測る。底面は平坦を呈する。西側に木材が立っている。

５）不明土坑

ＳＸ００１（図版４・５、第 23 図）

調査区中央やや北側、SB001 内で検出された土坑である。隅丸方形を呈し、長軸 1.64m、短軸 0.96m、深さ 0.08m を測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第 26 図）

７は弥生土器甕底部である。外面にタテハケを施す。８は土師器高杯の口縁部とみられる。杯部から屈曲部を有してやや外上方にのびて口縁端部を丸くおさめる。

ＳＸ００２（第 23 図）

調査区西側で検出され、西側が調査区外へのびている。平面形態は楕円形を呈し、長軸現存長 1.08m、短軸 0.94m、深さ 0.28m を測る。底面は平坦を呈する。

ＳＸ００３（第 23 図）

調査区中央やや北側、SB001 内で検出された土坑である。平面形態は不整方形を呈し、長軸 4.6 m、短軸 1.6m、深さ 0.14 ～ 0.25m を測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（図版７、第 26 図）

９は弥生土器甕の体部である。断面台形の突帯を有している。内外面ともにハケを施す。10 ～ 14 は土師器である。10 ～ 12 は椀である。11・12 は内外面ともにミガキを施すが、11 は底部外面付近にケズリを施す。13 は高杯である。脚中位から裾部へ開く。14 は小型手捏型土器の鉢である。15 は須恵器杯身である。受部は上方へ折り返している。内面にヘラ記号を有する。16 は青磁椀口縁部である。外面に連弁文を有する。

ＳＸ００４（図版５、第 23 図）

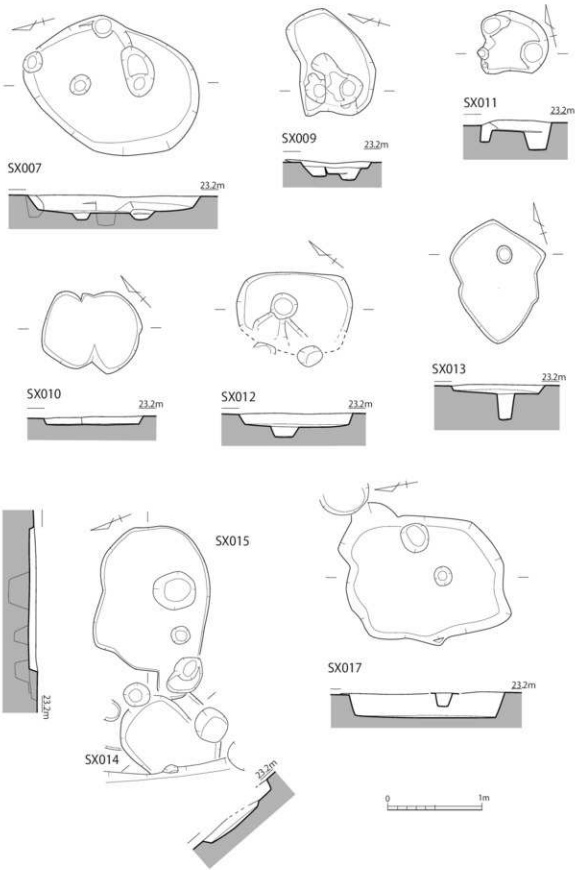
調査区中央やや南側で検出された土坑でＳＸ23 を切っている。円形状を呈し、長軸 0.72m、短軸 0.7m、深さ 0.12m を測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（図版７、第 26 図）

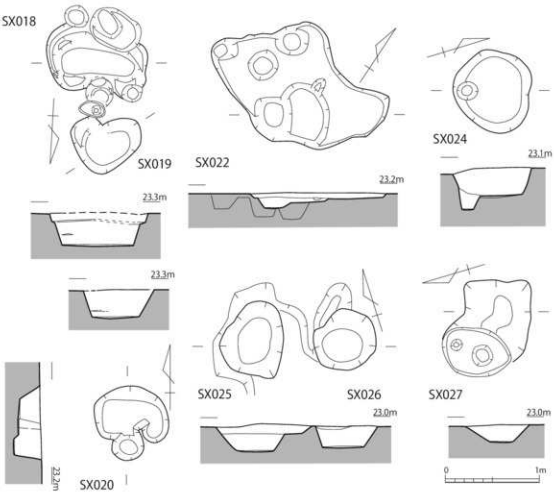
17 ～ 22 は土師器である。17 は椀である。口径 9.5cm、器高 4.8cm を測る。内外面ともにミガキを施す。18 は高杯で、椀型を呈する。19 は小型手捏型土器の鉢である。20 は丸底を呈する壺である。体部中位に沈線を施す。21・22 は甕である。体部外面はハケ、内面はケズリを施す。頸部の屈曲は明瞭でなく、口縁端部は 21 が面を有し、22 は丸くおさめる。

ＳＸ００５（第 23 図）

調査区南西隅で検出された土坑で、調査区外へのびる。不整円形を呈し、中央部分が深くなる。長軸 2.14m、短軸 1.98m、深さ 0.2 ～ 0.3m を測る。



第24図　不明土坑ＳＸ００７・００９～０１５・０１７実測図（1/40）



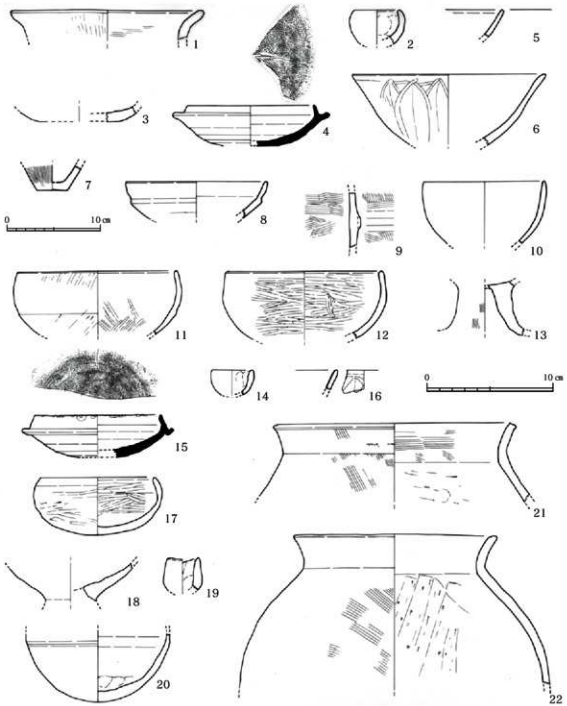
第25図　不明土坑ＳＸ０１８～０２０・０２２・０２４～０２７実測図（1/40）

出土土器（第27図）

23～25は弥生土器である。23・24は甕で23は甕口縁部である。口縁外面に刻目を有する突帯を持つ。内外面ともミガキを施す。24は甕底部である。外面はタタキの後ケズリ、タテハケを施す。25は壺体部上半である。櫛描の波状文と直線文を施す。26～35は土師器である。26・27は壺類の底部とみられ、底面は厚手である。26は外面にタタキ、内面にハケを施す。28は直口壺の口縁部である。29・30は甕である。29は短く外反する。30は頸部から少し屈曲して外上方に開く。ハケを施す。31は小型の鉢とみられる。32は椀である。口縁外面と内面はミガキを施す。33は直口壺である。口縁部が内側へのびている。外面タテハケ、内面にはヨコハケを施す。34は高杯脚部である。柱状を有して開くものと思われる。円形の透孔を入れている。35は軟質土器の甕類の口縁部とみられる。外面に縦方向のタタキ、内面には横方向のタタキを施す。

ＳＸ００６（第23図）

調査区南西で検出された土坑である。不整円形を呈し、長軸0.98m、短軸0.76m、深さ0.31mを測る。底面は平坦を呈する。

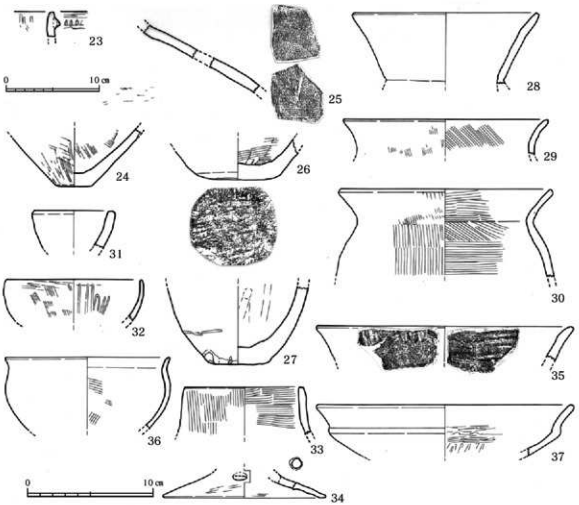


第26図　土坑ＳＫ００１・００３、不明土坑ＳＸ００１・００３・００４出土土器実測図１

（7・9：1/4、その他 1/3）

ＳＸ００７（第24図）

調査区南側で検出された土坑である。楕円形を呈し、長軸 2.1m、短軸 1.46m、深さ 0.2m を測る。底面は平坦を呈する。



第27図　不明土坑ＳＸ００５・００８出土土器実測図２（23～25：1/4、その他1/3）

ＳＸ００８（第３図）

調査区南側で検出された土坑である。コの字状を呈し、南北方向 1.13m、東西方向 0.73m、幅0.34m、深さ0.08mを測る。ピットが多く検出された。

出土土器（第27図）

36・37は土師器である。36は椀で口縁部が外反して短く開く。37は高杯杯部である。杯底部から屈曲して口縁部が開く。内面にはミガキを施す。

ＳＸ００９（第24図）

調査区南側で検出された土坑である。平面形態は不整楕円形を呈し、長軸1.3m、短軸0.94m、深さ0.8mを測る。底面は平坦を呈する。

ＳＸ０１０（第 24 図）

調査区南側で検出された土坑である。不整円形を呈し、長軸 1.15m、短軸 0.95m、深さ 0.09m を測る。底面は平坦を呈する。

ＳＸ０１１（第 24 図）

調査区南側で検出された土坑である。不整円形を呈し、長軸 0.86m、短軸 0.8m、深さ 0.12 ～ 0.2m を測る。底面は平坦を呈する。

ＳＸ０１２（第 24 図）

調査区南側で検出された土坑である。隅丸方形を呈し、長軸 1.32m、短軸 0.96m、深さ 0.14m を測る。底面は平坦を呈する。

ＳＸ０１３（第 24 図）

調査区中央やや南側で検出された土坑である。不整円形を呈し、長軸 1.42m、短軸 1.1m、深さ 0.1m を測る。中央付近に径 0.2m、深さ 0.3m の柱穴がある。

出土土器（第 28 図）

38 は土師器甕である。頸部の屈曲が不明瞭で口縁部は外反して開く。体部内面はケズリを施す。39 は須恵器杯蓋である。口縁端部内面に段を有する。

ＳＸ０１４（第 24 図）

調査区東側で検出された土坑で一部 SC001 に切られている。隅丸方形を呈し、長軸 0.92m、短軸 0.8m、深さ 0.13m を測る。

出土土器（第 28 図）

40･41 は土師器で 40 は高杯脚部上半である。41 は甕口縁部で頸部から屈曲部を有し、短く開く。内外面ともハケを施す。

ＳＸ０１５（第 24 図）

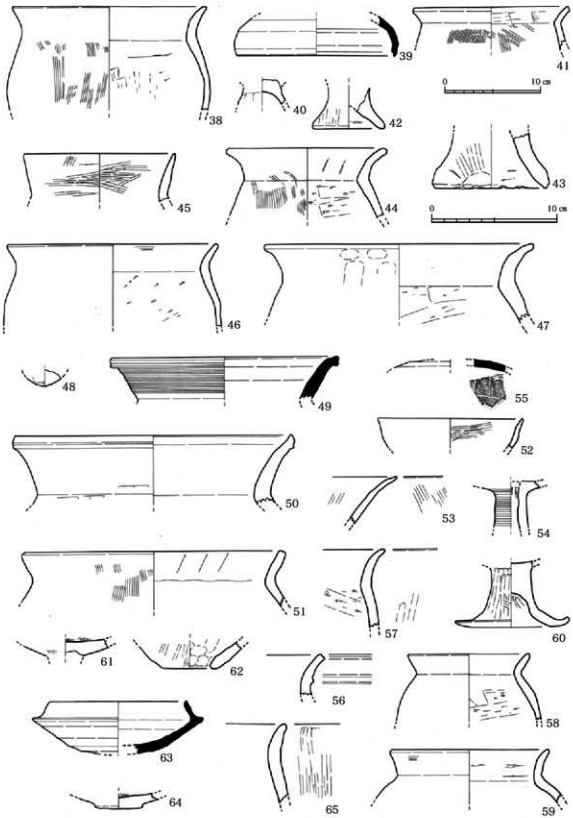
調査区東側で検出された土坑である。不整円形を呈し、長軸 2.0m、短軸 1.28m、深さ 0.07m を測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第 28 図）

42 ～ 44 は土師器である。42・43 は高杯類の脚部である。44 は甕口縁部である。頸部にやや不明瞭な屈曲部を有し、口縁部は外反する。体部外面はタテハケ、内面はケズリを施す。

ＳＸ０１６（第 11 図）

調査区東側 SC003 内で検出された土坑である。平面形態は楕円形状で長軸 1.25m、短軸 0.93m、深さ 0.07 ～ 0.18m を測る。底面は平坦を呈する。



第28図　不明土坑SX013～016、019～024・026・027出土土器実測図3(41:1/4,その他 1/3)

出土土器（第 28 図）

45 ～ 48 は土師器である。45 は壺口縁部とみられる。不明瞭な屈曲部からほぼ上方にのびる。内外面ともミガキを施す。46・47 は甕である。頸部は不明瞭で口縁部を外反させる。48 は小型手捏土器鉢の底部である。

ＳＸ０１７（第 24 図）

調査区南西で検出された土坑である。平面形態は不整方形状で長軸 1.83m、短軸 1.52m、深さ 0.3mを測る。底面は平坦を呈する。

ＳＸ０１８（第 25 図）

調査区南西で検出された土坑である。平面形態は楕円形で長軸 1.23m、短軸 1.07m、深さ 0.4mを測る。底面は平坦を呈する。

ＳＸ０１９（第 25 図）

調査区南西で検出された土坑である。平面形態は円形状で長軸 0.78m、短軸 0.7m、深さ 0.34mを測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第 28 図）

49 は須恵器壺口縁部である。口縁端部上下端をつまみ出している。外面はカキメを施す。

ＳＸ０２０（第 25 図）

調査区中央やや南側で検出された土坑である。長方形を呈し、長軸 2.16m、短軸 1.44m、深さ 0.14mを測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第 28 図）

50 は須恵器壺口縁部である。口縁端部上下端をつまみ出し、上端は上方にのばしている。

ＳＸ０２１（第 25 図）

調査区南側で検出され、SC002 に切られている土坑である。平面形態は方形を呈し、長軸 0.86m、短軸 0.8m、深さ 0.24mを測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第 28 図）

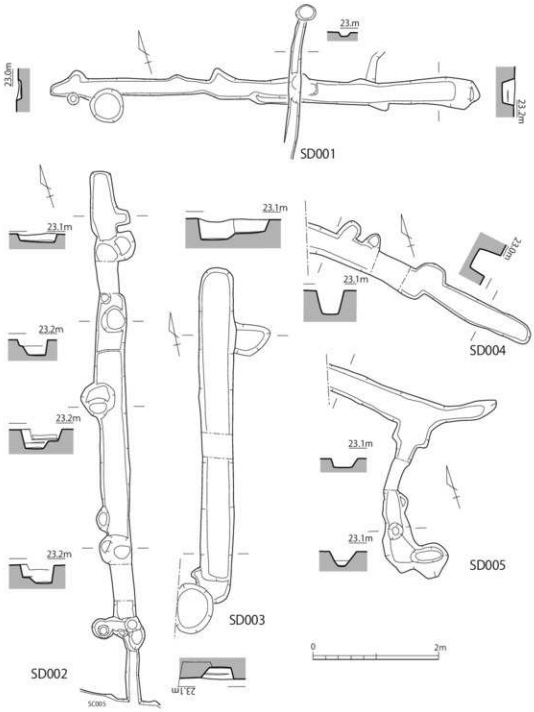
51 ～ 53 は土師器である。51 は甕口縁部である。口縁端部に面を有する。52･53 は高杯杯部である。52 は椀型を呈する。53 は杯底部が屈曲して外反して開くものとみられる。54 は土師器高杯脚部である。外面はカキメを施す。

ＳＸ０２２（第 25 図）

調査区中央やや南側で検出された土坑である。不整円形を呈し、長軸 1.24m、短軸 0.98m以上、深さ 0.18mを測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第 28 図）

55 は須恵器杯蓋で内面にヘラ記号を有する。



第29図　溝ＳＤ００１～００５実測図（1/60）

ＳＸ０２３（第23図）

調査区中央やや南側で検出された土坑でSX004に切られている。不整円形を呈し、長軸1.24m、短軸0.98m以上、深さ0.18mを測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第28図）

56～60は土師器である。56は壺類の口縁部とみられる。口縁部下に突帯を有する。57～59は甕

で 57 は口縁部がゆるやかに開く。58・59 は頸部がしまって口縁部が開く。内面はケズリを施す。60 は高杯脚部である。中実の脚部に裾部が開いて端部をやや折り返して丸くおさめる。

ＳＸ０２４（第 25 図）

調査区北側で検出された土坑である。円形を呈し、長軸 1.0m、短軸 0.93m、深さ 0.32m を測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第 28 図）

61・62 は土師器である。61 は高杯杯底部である。62 は甑の底部とみられる。

ＳＸ０２５（第 25 図）

調査区北側で検出された土坑である。不整円形を呈し、長軸 0.87m、短軸 0.74m、深さ 0.33m を測る。底面は平坦を呈する。

ＳＸ０２６（第 25 図）

調査区北側で検出された土坑である。円形を呈し、径約 0.7m、深さ 0.24m を測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第 28 図）

63 は須恵器杯身底部である。復元口径 16.0cm を測る。

ＳＸ０２７（第 25 図）

調査区北側で検出された土坑である。不整円形を呈し、長軸 1.33m、短軸 0.83m、深さ 0.21m を測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第 28 図）

64･65 は土師器である。64 は壺類の底部である。65 は甑類の口縁部である。外面ミガキを施す。

６）溝

ＳＤ００１（第 29 図）

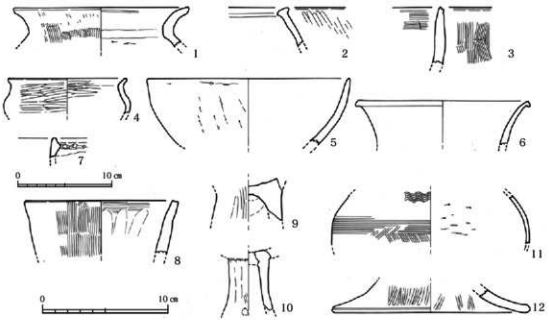
調査区中央東側で検出された溝で SC005 に切られている。長さ 7.33m、幅 0.5m、深さ 0.22m を測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第 30 図）

１～３は土師器である。１は甕の口縁部とみられる。体部内面にはケズリを施す。２は無頸壺類の口縁部である。口縁部上下端をつまみ出している。外面にミガキを施す。３は甑類の口縁部とみられる。内外面ともハケを施す。

ＳＤ００２（第 29 図）

調査区中央南側で検出された溝である。現存長 9.15m、幅 0.5m、深さ 0.2m を測る。



第30図　溝ＳＤ００１～００４出土土器実測図（7：1/4、その他1/3）

底面は平坦を呈する。

出土土器（第 30 図）　4～6は土師器である。4・5は椀で、4は口縁部を外反させている。内外面ともミガキを施す。5は内湾した体部に対しほぼ上方に口縁部がのびている。6は壺の口縁部で口縁下端部を折り返している。

ＳＤ００３（第29図）

調査区西で検出された溝である。長さ5.75m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（図版8、第30図）

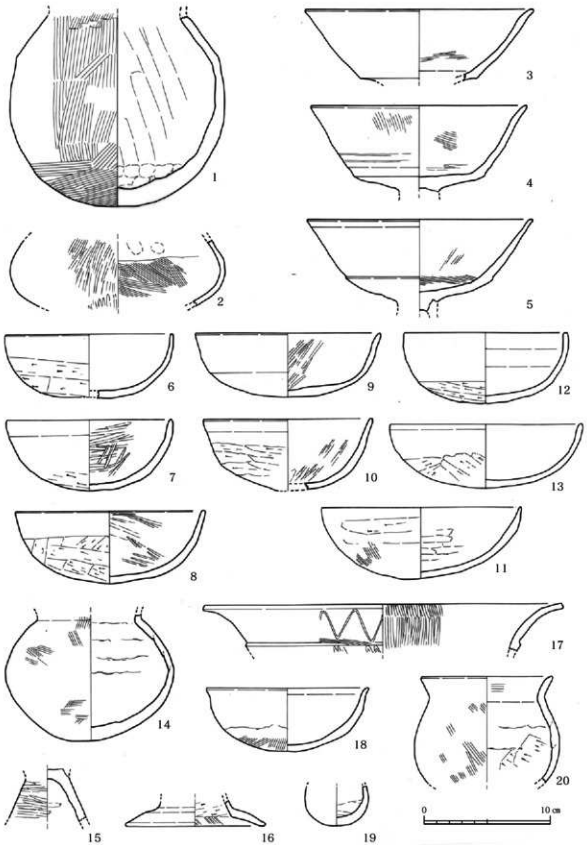
7は弥生土器甕口縁部である。口縁部外面に刻目を入れた突帯を有する。8・9は土師器である。8は壺類の口縁部とみられるが、甑類の可能性がある。9は高杯脚部である。

ＳＤ００４（第29図）

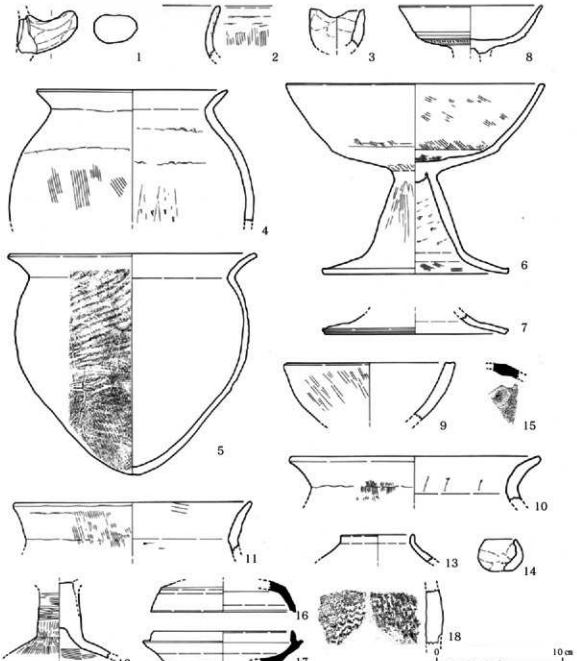
調査区北西で検出された溝で、調査区外へのびる。長さ4.2m以上、幅0.7m、深さ0.4mを測る。底面は平坦を呈する。

出土土器（第30図）

10～12は土師器である。10は高杯脚部である。下位に円形の透孔を入れている。11は壺の体部上半である。体部外面上位に櫛描の波状文、体部下半はカキメを施す。12 は高杯か器台の脚部とみられる。



第31図　土器群1・2出土土器実測図（1/3）



第32図　柱穴出土土器実測図1（1/3）

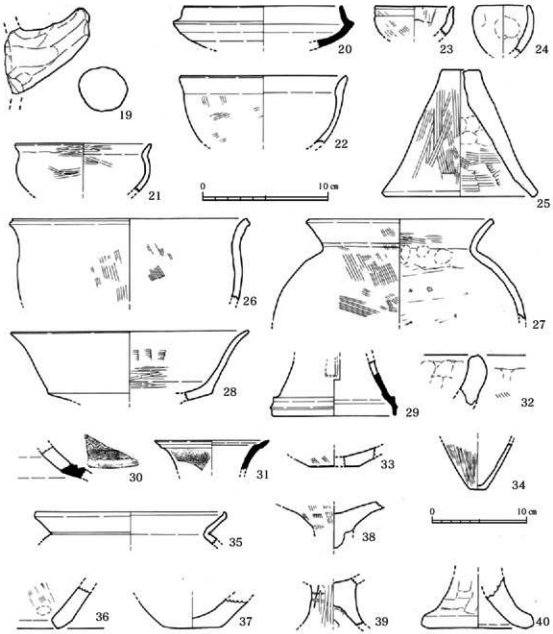
SD005（第29図）

調査区北西で検出された溝で調査区外へのびる。で南北3.0m以上、東西2.9m、深さ0.15mを測る。

7）その他

土器群1（第3図）

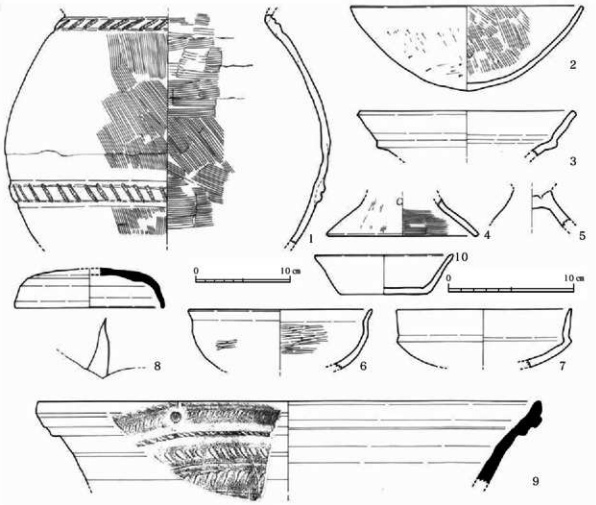
SC005検出前にまとまって出土した土器群である。



第33図　柱穴出土土器実測図2（33・34：1/4、その他1/3）

出土土器（図版8・9、第31図）

1～13は土師器である。1・2は壺体部である。1はやや厚手のつくりで丸底を呈し、底部内面は指オサエ、体部内面はケズリを施す。体部外面はハケを施す。2は体部外面がミガキを施す。体部内面はハケを施す。3～5は高杯杯部である。杯底部から若干内湾させながら口縁部を形成する、6～13は椀である。ほぼ完形品で口径13.0～15.8cm、器高5.0～5.8cmを測る。体部外面はケズリを施す。7～10の体部内面にはケズリを施す。



第 34 図　その他出土土器実測図（1：1/4、その他：1/3）

土器群 2（第 3 図）

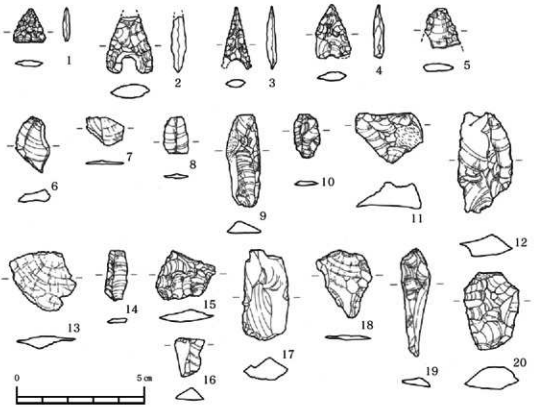
SC006 南側付近で検出した土器群である。

出土土器（図版 8・9、第 31 図）

14 ～ 20 は土師器である。14 は壺体部である。外面ハケを施す。15 ～ 17 は高杯である。15・16 は脚部で、15 は脚上端部から直線的に開く。外面はミガキを施す。16 は脚下半部で裾部が開く。脚柱内面はケズリ、裾部内面はハケを施す。17 は口縁部で杯底部から屈曲して開く外面に波状のミガキを施す。内面には縦方向のミガキを施す。18 は椀である。口径 12.8cm、器高 5.0cm を測る。口縁部がわずかに外方へ開く。19 は小型手捏型土器鉢である。20 は甕である。体部外面はハケ、内面はケズリを施す。

柱穴出土土器（図版 9・10、第 32・33 図）

1 ～ 14 は土師器である。1 は甑の把手である。体部に差し込んでいる。2 は壺の口縁部とみられる。外面にハケを施す。3 は小型手捏型土器鉢である。4・5 は甕である。4 は頸部から口縁部が短く開く。体部外面にはハケ、内面にはケズリを施す。5 は口縁部が外反して開く。底部付近がハケを施すが、体部外面は明瞭なタタキを施す。6 ～ 8 は高杯である。6 は完形品で口径 1.1cm、



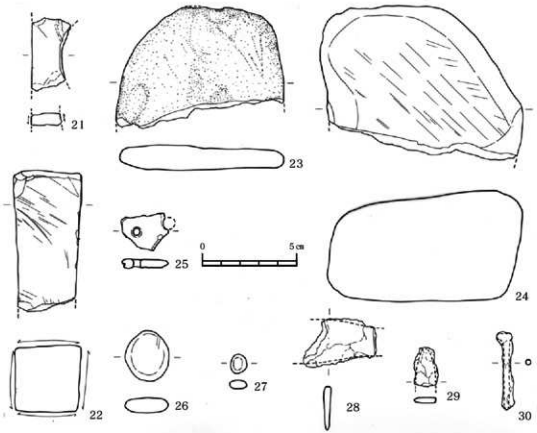
第 35 図　出土石器実測図 1 （2/3）

器高 15.5cm を測る。杯底部から屈曲して若干内湾させながら口縁部が開く。杯部内外面はハケを施す。杯部と脚部は円盤充填法で接合している。脚部は直線的に開いて裾部は大きく開く。裾端部は上方につまみ出している。7 も脚裾端部を上方につまみ出すが端面に沈線を 2 条入れる。8 は杯底部から内湾させて口縁部がのびる。杯底部外面には沈線の間に刻目を施す。9 は鉢である。外面はミガキを施す。10・11 は甕である。10 は頸部から外反して開く。11 は頸部からやや上方に開く。外面はハケを施す。12 は高杯脚部である。脚柱は中実で裾部に向かって外方に開く。外面はミガキを施す。13 は無形壺口縁部である。14 は小型手捏土器鉢である。

15 ～ 17 は須恵器である。15・16 杯蓋で 15 は内面にヘラ記号を有する。16 は口縁端部内面に段を有する。17 は杯身である。

18 は縄文土器の押型文土器である。外面は斜位方向に、内面は上位ナデ、下位に横位の山形文を施文する。

19・21 ～ 28・32・35 ～ 40 は土師器である。19 は甑の把手である。21・22 は椀である。21 は体部から短く外反させている。内外面ともミガキを施す。22 は体部から口縁部がわずかに開いている。23・24 は小型手捏土器で 23 は椀型、24 は鉢である。25 は高杯の脚部である。杯底部から直線的に裾部まで開く。外面と裾部付近の内面はハケを施す。26・27 は甕とみられる。26 は頸部が不明瞭で口縁部が短く開く。27 は頸部がしまり、口縁部が外上方に開く。体部外面はハケ、内面はケズリを施す。28 は高杯である。杯底部から屈曲して外反して口縁部が開く。32 は坩堝口縁部の破片とみられる。口縁端部はナデを施すが、体部内外面はユビオサエがみられる。35 は甕口縁



第36図　出土石器実測図2（1/2）

部である。口縁端部は上方へつまみ出している。36は甑の底部である。内面はケズリを施す。37は壺類の底部とみられる。38～40は高杯である。38は杯底部で円盤充填がみられる。39は脚部上半で脚裾部へ向かって開く。40は厚手のつくりで裾部が短く開く。

20・29～31は須恵器である。20は杯身である。受部はあまり突出していない。29は高杯脚部である。長方形の透孔を入れている。脚裾部を2段に屈曲させて端部はうすく仕上げている。全体的につくりがシャープである。30は器台の下半部である。脚裾部付近に透孔を入れている。沈線の上に櫛描波状文を施している。31は壺類の口縁部である。口縁端部を屈曲させ外方に開いている。外面に波状文を施している。

33・34は弥生土器である。33は壺底部、34は小型甕底部である。

その他出土土器（図版10、第34図）

1は弥生土器甕体部である。頸部と体部やや下半に刻目を施した突帯を有している。突帯の上下には沈線を施している。内外面ともハケを施す。2～7は土師器である。2は口径18.5cm、器高 6.8cm を測るやや大型の鉢である。3は壺の口縁部で2重口縁を呈する。4・5は高杯脚部である。4は裾部で直線的に開く。外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。5は脚上半で上端から裾へ向かって開く。6・7は椀である。6は体部から少し外方に口縁部が開く。7は体部から

屈曲してやや上方に口縁部が開く。　8・9は須恵器である。8は杯蓋である。内面にヘラ記号を有する。9は大甕口縁部である。口縁端部外面に貼り付けて拡張させ、口縁端部は上方に丸くおさめる。口縁端部外面に刻目を施し、その上に円形浮文を貼り付ける。口縁下端部にも刻目を施す。口縁部外面は刻目文を、間に沈線を施す。10は土師器皿である。口径11.0cm、器高3.2cmを測る。

8）出土石器

1～5は打製石鏃である。1は基部が平基で平面形が正三角形を呈する。長さ1.4cm、0.37gを測る。2は基部の抉りが深い、いわゆる鍬形鏃である。上部を欠損している。現存長2.3cm、2.03gを測る。3・4は平面形が二等辺三角形を呈する凹基鏃である。3は左基部の一部を欠損している。長さ2.6cm、0.67gを測る。4は浅い凹基のもので、右基部の一部を欠損している。長さ2.25cm、0.99gを測る。5は下部を欠損している。6～20は剥片石器である。石材は、13・15はサヌカイト製で1～12・14・16～19は腰岳産の黒曜石とみられる。20は椎葉川産の黒曜石とみられる。21は石包丁の2次製品とみられる。厚さ1.7cmを測る。大きく内湾する。輝緑凝灰岩製とみられ赤紫色を呈する。22は砥石である。下半分を欠損しており、現存長7.6cm、幅3.9cm、厚さ3.7cmを測る。石英斑岩製である。23･24は叩石である。23は砂岩製、24は安山岩系である。25は不明石製品である。径0.4cmの円形の孔を2箇所有するが、自然にできた可能性もある。厚さ0.4cmを測る。26・27は碁石と推定される円盤状の石製品である。26は白石で、3.0×2.5cmの円形を呈し、10.15gを測る。27は黒石で、3.0×2.5cmの円形を呈し、0.7gを測る。28～30は鉄器である。28は刀子とみられる。幅2.5㎝、厚さ0.4cmを測る。29は鉄鏃の先端部である。幅1.4㎝を測る。28･29はSC003出土。30は釘とみられる。長さ4.2㎝、径0.3cmを測る。SK003出土。

Ⅳ．おわりに

今回の調査で検出した遺構は竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡2棟、井戸4基、土坑6基、不明土坑27基、溝5条を確認した。遺構は調査区全体に分布している。竪穴住居跡は概ね調査区の東半に所在し、SC001・003・005・006はやや南北に軸をそろえているようである。一方SC004・007は軸が近似している。また、住居の形態について、全体が判明したSC001・006・007は隅丸長方形を呈している。掘立柱建物跡SB001・002は軸をそろえており、同時期のものとみられる。井戸は4基検出されており、出土遺物は混入もあるものの、概ね7～8世紀に位置づけられる。溝はSD001～003が東西と南北方向を示しており、SD001と002は区画溝として機能している可能性がある。また、SD004と005は軸がそろっており、同時期に存在したかもしれない。土坑と不明土坑は調査区の北と南に集中しているようである。出土土器から見ると概ね古墳時代に属するとみられる。

出土遺物について縄文土器では押型文土器が出土している。調査区全体で見ても、押型文土器や条痕を有する土器のみで、縄文時代早期に概ね限定された時期に営まれたものとみられる。石鏃や剥片石器などの出土地点からみても調査区全体に集落があったものとみられるが、具体的な遺構は確認できなかった。弥生土器について、第27図23、第30図7の突帯文土器や第27図25の前期

壺が出土しており、弥生前期から集落が存在している可能性が指摘できる。第６図１～３は口縁部外面に凹線を施しており、瀬戸内地方の関係がうかがえる。また、第６図12・第17図７・８のような高杯も東部瀬戸内地方にみられるものである。古墳時代の遺物については、SC003 から製塩土器（第 12 図 17 ～ 19）が出土している。薄手椀型の形状を呈しており、形態等の特徴から古墳時代中期前半とみられ、第 12 図 20・21 須恵器の時期とあまり相違ないとみられる。これらの製塩土器は北九州市千防遺跡で多く出土している。近くに所在する初音遺跡で鹹水・煎熬などの製塩作業を行ってできた粗塩を千防遺跡で精製して固形塩として出荷したり焼塩にして貢納したりする一連の工程が想定されており、中園遺跡 SC003 は塩を消費したものとみられる。市内ではこの薄手椀型の土器が確認されたのは初めてであり、製塩遺跡との関連性をみることができる。また、柱穴から坩堝が出土している。鋳造関係のものであり、近辺に鋳造遺構の存在をうかがわせる。鋳造関係では、後田遺跡で羽口が出土しており、周囲を含めた遺跡で鋳造などの作業を行っていたものとみられる。

当遺跡（調査対象範囲）の 150m東側は穂波川が南北に流れており、また、約 200m南西に泉河内川との合流地点がある。現地形からみると、当遺跡の 50m南側・東側では大きな段差があり、以前はこのラインが川の流れであったことを示している。その結果、当遺跡は穂波川・泉河内川合流地点の拠点集落であった可能性がある。最近では中園遺跡の北西 250mで畑田遺跡が試掘調査で確認されており、古墳時代の集落跡とみられている。また、近年では太郎丸付近で多くの発掘調査が行われている。中園遺跡の北西 70mの後田遺跡１次調査は７～８世紀のものを中心とした遺物が包含層より比較的まとまって出土している。また、平瓦、鞴の羽口、碁石といった一般の集落ではあまり出土しない遺物が発見されている。２・３次調査では 12 世紀前半頃の溝や縄文時代の土坑が確認されたが、古代の明確な遺構は確認できなかった。さらに、中園遺跡の北西 400mの丸ノ内遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居跡や 12 ～ 14 世紀代の掘立柱建物跡が確認されている。このように穂波川と内住川に挟まれた久保白丘陵北側の縁辺部には少なくとも縄文時代、古墳時代、中世各時代の集落が所在していることが明らかとなった。周辺の試掘調査の結果から畑田遺跡と後田遺跡の間は谷地形が存在しているために各遺跡は点在する状況で、古墳時代は丸ノ内遺跡と畑田遺跡、中園遺跡、古代は後田遺跡を中心とした範囲、中世は丸ノ内遺跡・後田遺跡と中園遺跡が集落として展開している状況がうかがえた。後田遺跡１次で確認されたような古代の公的な施設等を関連させるような遺物は坩堝など少数確認されたものの、遺構などから積極的に把握できるものはなかった。今後の周辺の調査の進展に期待したい。

【参考文献】

関 川 妥 編　2008 『千防遺跡第１・２地点』 北九州市文化財調査報告書第 115 集　北九州市教育委員会

柴尾俊介編　2016 『初音遺跡』 北九州市埋蔵文化財調査報告書第 550 集　（公財）北九州市芸術文化振興財団

櫛山範一編　2020 『後田遺跡』飯塚市文化財調査報告書第 56 集　飯塚市教育委員会

櫛山範一編　2023 『後田遺跡２・丸ノ内遺跡』 飯塚市文化財調査報告書第 59 集　飯塚市教育委員会

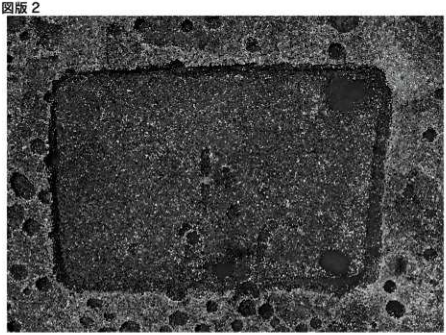
図　　版

1．調査区遠景（南から）

2．調査区近景（東から）

3．調査区全景（東から）

図版２



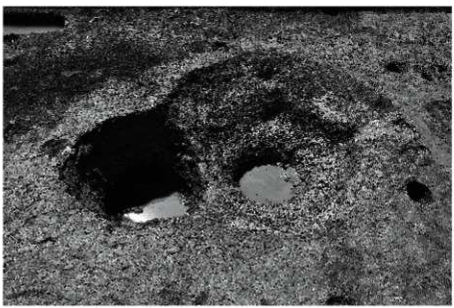
１.ＳＣ００１（東から）

２.ＳＣ００６（北から）

３.ＳＣ００７（東から）

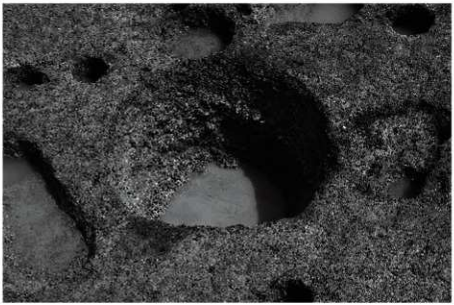
１．ＳＣＯＯ７遺物出土状況
（東から）

２．ＳＥＯＯ１・ＯＯ２土層
断面状況（東から）



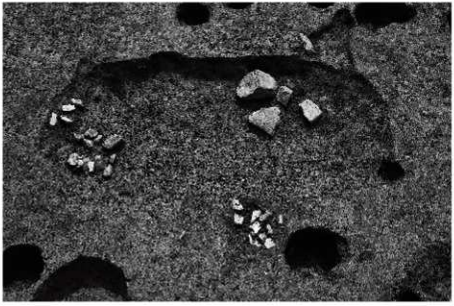
３．ＳＥＯＯ１・ＯＯ２
（東から）

図版４

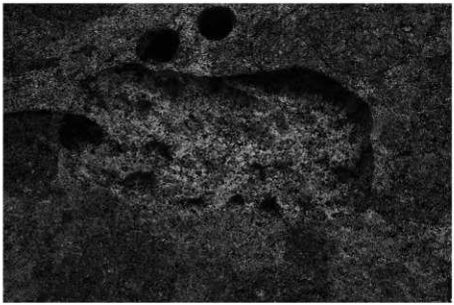


１．ＳＥＯＯ３（南東から）

２．ＳＥＯＯ４（北から）



３．ＳＸＯＯ１（西から）

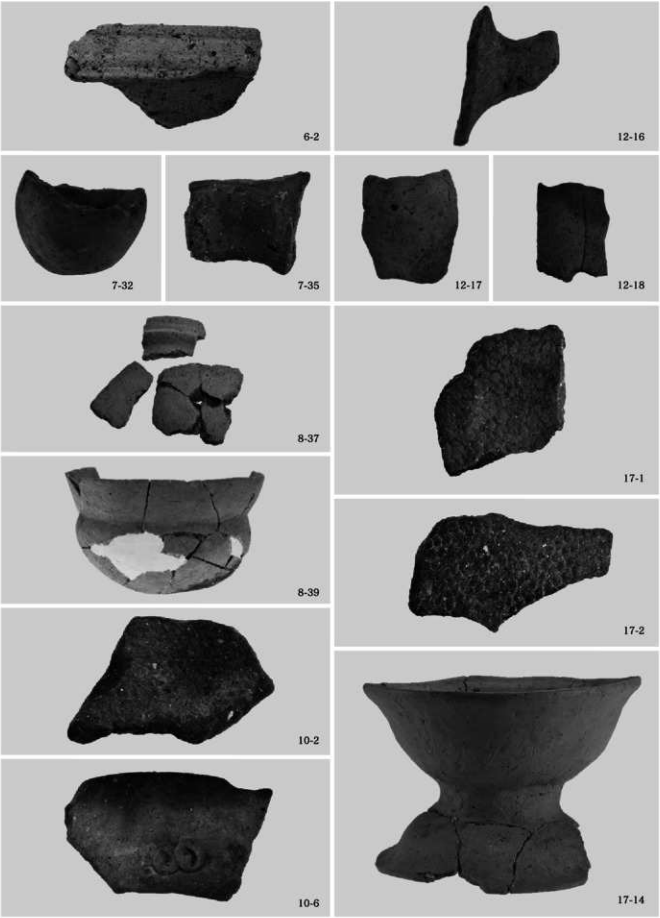


１．ＳＸ００１（西から）

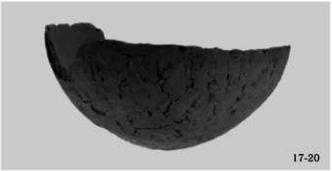
２．ＳＸ００４遺物出土状況（東から）

３．ＳＰ１４３遺物出土状況（北から）

図版 6



出土遺物 1


17-20

17-21

21-6

21-9

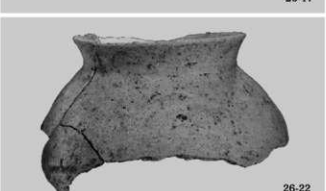
21-12

26-6

26-12

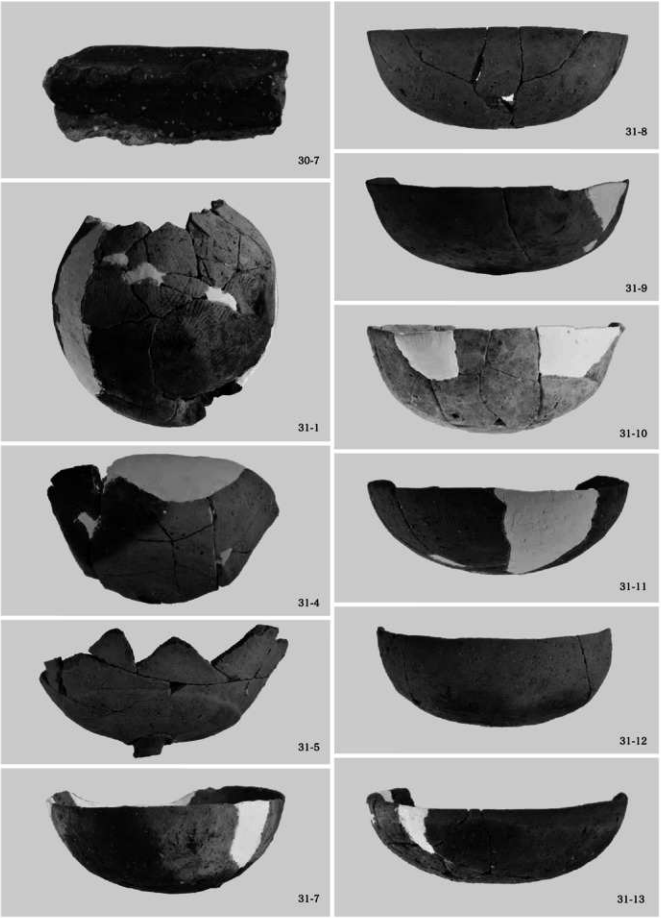
26-15

26-17


26-22

出土遺物 2

図版 8

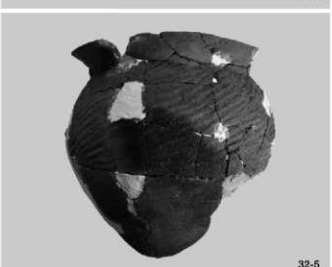


出土遺物 3

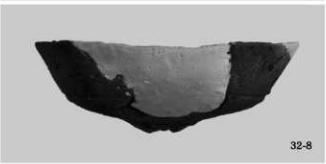
31-14

31-17

32-4

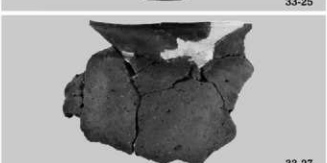

32-5

32-6

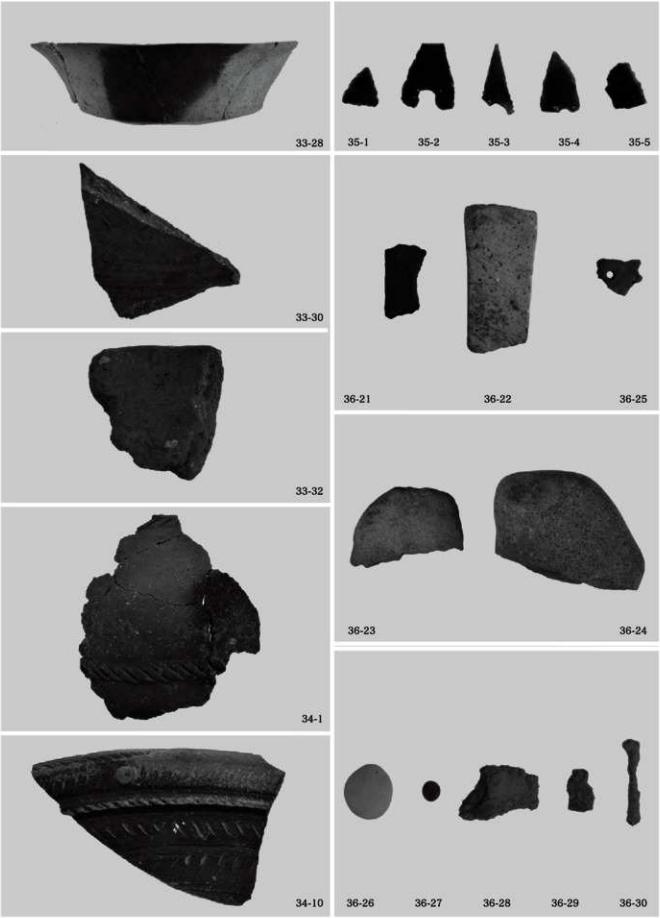

32-8

33-19

33-25


33-27

出土遺物 4


33-28
35-1
35-2
35-3
35-4
35-5
33-30
36-21
36-22
36-25
33-32
36-23
36-24
34-1
34-10
36-26
36-27
36-28
36-29
36-30

出土遺物 5

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なかぞのいせき
書 名	中園遺跡
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	飯塚市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第61集
編 著 者 名	八木健一郎
編 集 機 関	飯塚市教育委員会
所 在 地	〒820－8501 福岡県飯塚市新立岩5番5号 TEL 0948-22-5500
発 行 年 月 日	2024年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかぞのいせき 中園遺跡	おおあかたまるいっちょうめ 福岡県飯塚市太郎丸	40205		33° 60′ 62″	130° 67′ 34″	2021.2.17 ～ 2021.6.18	1,000㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主な遺物	特記事項
中園遺跡	集落跡・ 散布地	古墳 古代/中世	竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡2棟、井戸4基	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品	

要 約	中園遺跡は穂波川中流域の左岸、標高約22mの微丘陵台地上に立地する。今回の調査は遺跡範囲の東側部分に該当し、調査原因は老人ホーム建設に伴うものである。表土下約0.2～0.25mで遺構面が検出され、竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡2棟、井戸4基、土坑6基、不明土坑27基、溝5条等が確認された。遺物としては、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品等が出土した。本遺跡は縄文時代から中世まで存続しているが、周辺の遺跡と同じく古墳時代、古代、中世に集落として展開している状況がうかがえた。

中　園　遺　跡
飯塚市文化財調査報告書
第61集
2024年（令和6年）3月29日

発行　飯塚市教育委員会
〒820-8501　福岡県飯塚市新立岩5番5
電話（0948）22－5500
印刷　ダイワ印刷株式会社
〒820-0046　福岡県飯塚市大日寺1419番地1
電話（0948）24－6633